

# 学内広報

for communication across the UT



特集： ■ 広報センターは今年 15 歳になりました  
■ 平成 22 年度第 1 回学生表彰「東京大学総長賞」授与式開催

2010.11.24

No. 1405

# 特集 広報センターは今年15歳になりました

今年9月21日で開設満15周年を迎えました。これはひとえに、いつもご来館くださる皆さま、閲覧資料・配布資料等をご提供くださる各部局および本部の皆さまのおかげと感謝しております。ここに15年間の記録と広報センターの素顔をお伝えしたいと思います。

ほそや  
です

なつめ  
です



ご来館をお待ちしております♥

## 広報センターへようこそ!

学内外、性別、年齢も問わずどなたでもご利用いただいております！  
1階は資料の配布、視聴覚、展示です。2階は資料閲覧室です。  
気ままにお立ち寄りください。そしてどうぞ私たちにお声をかけてください。  
学生サークルの紹介もしています。こちらの展示もぜひ見に来てくださいね。

### 学生サークル「CAST」より一言!



不思議体験してみてね



実験道具はこれだ!!

私たちは、全学自由研究ゼミナール「心を動かす表現法」の卒業生が創設した科学の面白さを伝えるサークルです。学校や科学館での出張授業や実験ショーなどを行っています。広報センターでは、7月より実験を紹介していただいています。実験道具はいつでも手に取って、気軽に楽しめます。消える?くっつく?常識を超える現象の数々を、ぜひ体験してください!これから実験を随時入れ替えて、私たちの理科教育に対する取り組みをアピールしていきます。

HP: <http://ut-cast.net/>

### 学生サークル「Orist」より一言!



もう折れないものはない!



納豆、ご飯、お箸まで?

こんにちは、折紙サークルOristです。私たちのサークルでは、本学で行われる学園祭での作品展示が主たる作品発表の場となっておりますが、昨年の7月より広報センターの方で常設展をしておりますので、学園祭期間中以外でも作品鑑賞を楽しんでいただけます。ぜひ、多くの方々にお越し頂きたく思います。毎週水・金曜日に駒場生協食堂で、15人程度で通常活動しています。見学の御予約・御質問等、お気軽にご連絡ください。

HP: <http://orist.tiyogami.com/> Mail: [orist.ut@gmail.com](mailto:orist.ut@gmail.com)

### 開設当時を知るこの方より一言!



一度、訪れてみてください

大学院薬学系研究科・薬学部 副事務長 新川 昇さん

当時の東京大学で、外部に対して積極的ではなかった「広報」の施設として、1995年9月に「広報センター」をオープンさせたことは画期的な事業でありました。場所は、病院への通り道でもある「龍岡門」脇であるため、当初は案内係としての毎日が続いていたと思います。スタッフの男性が大学職員のOBということもあって、可能な限りの大学関係資料を集めて置き、ぶらっと立ち寄れるような雰囲気になりました。現在は、内容もかなり充実しており、一般社会に対して、大学の「広報」としての存在感が出てきたと思います。

### 設置場所を推薦したこの方より一言!



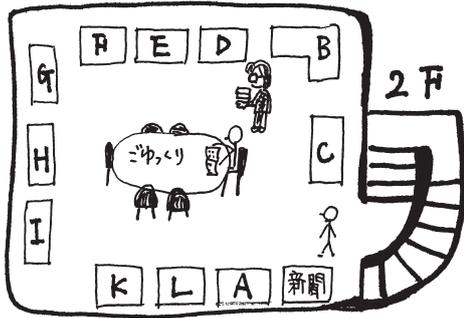
落ち着いたこの建物が好きです

大気海洋研究所 総務課 専門員 菊地みつ子さん

広報センターが設置されたのは、私が広報室に異動した年でした。当時は、社会的に広報の必要性や学外者からのキャンパスツアーなどを要求された時期でもありました。建物をどこにするかという時に、龍岡門横の建物に心を動かされて、間取りや動線も良いので推薦したらOKが出て、とても嬉しかったことを今あらためて思い出しています。今後、広報センターが、東京大学の情報発信の場であると共に、広く市民に愛される広報の場として、ますます発展することを期待しています。

# 館内図鑑

2階は資料閲覧室です。



屋上の出口。  
銀杏拾いが大変  
なんです(涙)



2Fでは好評の紙芝居を披露

## キャンパスツアー ガイドより♪

キャンパスツアーは、今年で活動開始から7年目を迎えます。毎週土日に120~150名程度のお客様にキャンパス内の建物や大学の歴史をご紹介します。広報センターにおいても学生生活や大学の資料の紹介をしています。

HP : <http://campustour.pr.u-tokyo.ac.jp/index.html>



私たちがご案内します！



安田講堂にも同様の螺旋階段あり

- A. 大学院・学部概要
- B. 教養学部
- C. 講義要項
- D. 入試関連
- E. 理系年報
- F. 文系年報
- G. 理系研究所概要
- H. 文系研究所概要
- I. 全学ニュース
- K. 大学史など
- L. 全学総合案内

\* 2Fの閲覧資料はこのように分類されています。



窓の向こうは  
春日局の眠る麟祥院

<旧>



<新>



広報センターの看板の下には何と旧看板が！  
(建物は大正15年東京帝国大学附属医院急病者受付所として竣工)

## ご利用案内♪

本郷キャンパス 龍岡門横

開館日 月曜日～金曜日  
(祝日を除く)

開館時間 10時00分～16時30分

<最寄駅>

丸の内線本郷三丁目駅より 徒歩8分

千代田線湯島駅より 徒歩8分

大江戸線本郷三丁目駅より 徒歩5分

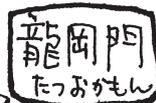
<バス>

上野駅「浅草口」・お茶の水駅「聖橋口」より  
「東大構内」行き、龍岡門下車

← 至東大病院

学バス通り - お茶の水駅と上野駅行

至春日通り →



本部棟へ



<門衛所>

特別編



皆さんご存知でしょうか？  
東大病院外来棟上部に並んだ  
レリーフ。その中にこの紋様  
がデザインされています♪  
ピ〜ときた方はかなりの  
東大通！?とお見受けします。



\*1

広報センターは龍岡門(ツツオカモン)の真横にありますが、その目の前で“門はどこにあるのか？”とよく聞かれます。“こちらですよ”と指をさしますと「あ〜これね。」とつれないお返事。どうしてか？ それは門扉がないからです！ なぜないのか？  
〜今回は、龍岡門の変遷をたどります〜



こちらは、  
大正15年〜昭和8年頃

『本郷キャンパスの百年』より

この辺り、江戸時代には加賀藩邸の境目でしたので、もしや当時からあったのではないかと？と絵図を見てみましたが、門などはなくて囲われていました。それでは！と、「帝国大学略図」（構内地図）を開いてみると、1894（明治27）年頃に初めて南新門が現れます。これが門の始まりかもしれません。

現在の龍岡門は、1933（昭和8）年頃に建てられたようです。資料によると、【鉄筋コンクリート造り両開き及び片開き木扉付】と記載があって、たしかに門扉が付いていました。

が、しかし・・・時は流れて・・・

1980（昭和55）年6月18日付の読売新聞の見出しに【東大“狭すぎる”龍岡門の悩み】を発見！

車の正門と言われるほど交通量が多いにもかかわらず、門柱の間がわずか4.4mしかなく、学バスなど大型車が通ると反対車線では身動きができないとありました。撤去との声も強かったようですが、安田講堂の設計も手掛けた岸田日出刀教授が設計した由緒もあるので、壊すことなどもつてのほかかと反論も出たとありました。

右の写真は、構内に入ろうとする乗用車と春日通りへ向かうダンプカーが対向する瞬間のまさに記録に残る一枚！



\*2



平成6年 道路拡張前

それから14年後の1994（平成6）年、西側の門柱と門衛所が移動されて、道路の道幅が広がったわけでありませう。そうです！このときに、門扉はあえなく取り外されてしまったのです。さんねん・・・。

ところで、外された門扉はどこへ行ってしまったのでしょうか？もしや建物と建物の隙間に立て掛けて仕舞ってあったりはしないかと、こっそり構内の隙間を覗き見たりしたこともありましたけど・・・（怪）。

ちなみに『東大病院だより』（2005（平成17）年8月31日No.50）によると、「龍岡門の飾りは病院が保管している」とありました。木扉はもうないかもしれませんが、その中の一部でも残っていると知って、龍岡門の隣りに居る者としては、ちょっと嬉しいです。

♪ あ、そうそう！\*1の写真、ビスケットみたいですがまさしく龍岡門扉にあった紋様が外来棟レリーフにデザインされたときの【型見本】です。直径は30cmあります。♪  
(\*2の写真と見比べてみてください。同じですよ♥)



平成6年 工事中



平成22年11月 現在の様子

かくして龍岡門は門柱だけとなりましたが、本郷キャンパスへの入り口の一つとして、門戸を大きく開けております。そう言えば以前、登竜門(トウリユウモン)と読み間違えたお客様がありましたっけ。隣りに寄り添う広報センターも、東京大学に興味を持っていらっしゃる方々への登竜門でありたいと想いを寄せながら、今回はこれにておしまいです！（ここまでお読みくださり深謝！）

# 広報センター来館者資料

表1. 年度別来館者数の推移



表2. 本年度4月～10月来館者数の推移

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	4月-10月合計
個人の来館者	376	314	421	488	543	512	526	3,180
団体見学者	326	227	561	522	446	121	368	2,571
道案内	47	22	34	17	23	29	38	210
合計	749	563	1,016	1,027	1,012	662	932	5,961
(男性/女性)	(388/314)	(258/283)	(508/474)	(543/467)	(534/455)	(374/259)	(437/457)	(3,042/2,709)

\*男性数・女性数は道案内数を含まない。

表3. 2010年度 入試関係資料配布数

大学案内	選抜要項	センター試験 受験案内	入学者 募集要項	外国学校卒業学生 募集要項
7,278	342	204	372	55

## 学内を広報させていただきます！

新年度、「閲覧資料のご提供依頼」をポータルサイトにてお願いしておりますが、随時、受けつけておりますのでいつでもご連絡いただければ幸いです。配布可能な発行物がありましたら、ぜひお送りいただきたいと思います。本学主催の講演会やイベントなど、ポスター掲示やちらしの配布も行っています。どんなことでも、よろしければご一報願います！

お問い合わせ：広報課（内線 22031）または 広報センター（内線 22411）  
 広報センターHP：[http://www.u-tokyo.ac.jp/gen03/public02\\_j.html](http://www.u-tokyo.ac.jp/gen03/public02_j.html)



# 特集 平成22年度第1回学生表彰「東京大学総長賞」授与式開催

平成22年度第1回(秋)の総長賞は、学業以外の課外活動等を対象として募集を行い、合計18件の推薦をいただきました。学生表彰選考会議の厳正なる審議の結果、個人2件、団体1件の計3件が受賞者として選出され、10月19日に授与式が開催されました！

## 日時

10月19日(火)  
17:00~18:00

大学院数理科学研究科  
大講義室  
(駒場 I キャンパス)



総長賞を授与される長山さん



受賞者全員との記念写真



総長賞を授与される  
三井さん



プレゼンテーションをする  
東京大学フォーミュラファクトリー

授与式では、総長から表彰状と記念品が受賞者に贈呈された後、各受賞者から今回の受賞内容に関するプレゼンテーションが行われ、それぞれの活動に対する思いや関係者への感謝の意等が述べられました。

なお、本授与式には、本学学生、サポートいただいた関係者、教職員、本学OB・OG等、約200名が参加し、賑わいのある祝福と交流の場となりました。

懇談会では受賞者の作品も展示され、来場者と受賞者との積極的な交流が促されました。

## 式次第

奏楽 東京大学音楽部管弦楽団  
(平成14年度第2回受賞団体)

### 《授与式》

- 開会挨拶
- 選考結果報告
- 表彰状及び記念品の授与
- 総長挨拶
- 受賞者プレゼンテーション
- 記念撮影

### 《懇談会》

懇談  
「ただ一つ」斉唱 運動会応援部  
(平成14年度第1回受賞団体)

フォーミュラカーに乗り、説明を受ける総長



三井さんによる作品展示  
「ホワイトタイガー」

受賞者の皆様の更なる  
ご活躍を期待します！



## 【個人】2件

## 三井 淳平(工学系研究科 修士課程1年)



三井氏は2006年に東大レゴ部を創設し、レゴブロックを素材とした創意工夫に富んだ作品群を制作すると共に、関連する課外活動に積極的に取り組んでいる。個人としても、高度な技術力と発想力が国内外で評判となり、各種のコンテスト等で受賞し、海外のイベントで招待講演を行うなど、その活躍の舞台は国内にとどまらない。また、これらの課外活動を通じて、世界遺産の保護や子どもの権利保護などのチャリティーイベントにも積極的に参加している。ちなみに、同氏らが中心となって制作した「レゴタワー」は「レゴブロックで作る世界一高い塔」としてギネス世界記録にも正式認定され、また、2010年には、その年に世界で発表された個人制作レゴ作品の中で最も優れた作品に与えられるMOC of the yearを受賞した。さらに、母校の中学校においても「レゴブロックによる立体表現」をテーマにした講演を毎年行うなど、教育活動にも熱心である。これらの長期にわたる国内外での一連の活動が高く評価された。

## 長山 大介(新領域創成科学研究科 博士課程2年)

長山氏は、本学がイニシアティブをとって発足したG8大学サミットの主要行事であるG8 Student Summit 2010に本学の代表として参加し、その最終提言書の起草委員会のメンバーとして活躍した。2006年に台湾で開催された東アジア研究型大学協会の学生フォーラムに本学から派遣され、最も貢献度が高い学生に送られる「Mr. AEARU」を受賞した。この活動がきっかけとなって、同氏は自身が国際交流に参加するだけでなく、広く東大生の国際交流活動を進めるべきであるとの想いを抱き、2007年に東京大学学生国際交流機構(UT-IRIS: [www.ut-iris.org](http://www.ut-iris.org))を創設し、国際交流情報や体験談の発信、新規国際交流プログラムの企画立案、本学主催国際交流企画(東大-イェール・イニシアチブ、IARU、清華大ウィークなど)の支援等を行ってきた。このように自身が国際会議で「タフな東大生」を体現するだけでなく、「東大生の国際化」を推進する活動も積極的に行っていることが高く評価された。



## 【団体】1件

## 東京大学フォーミュラファクトリー



東京大学フォーミュラファクトリー(UTFF)は(社)自動車技術会主催の「全日本学生フォーミュラ大会」に第1回から参加し、昨年度の第7回大会において総合優勝を果たした。この大会はフォーミュラレーシングカーの企画・設計・製作・試験・改良という一連の活動を通じてのものづくり産業を支える人材の育成を目的としている。UTFFは、世界にも例を見ない電子制御無段変速機を搭載した自動変速車両を設計・製作し、総合優勝した。多くの大会参加者に「流石東大」と言われしめ、本学の名誉を大いに高めた。また、UTFFは理系学生だけでなく、文系学生も加わったNPO法人「自動車技術を学ぶ会」を設立し、講習会や展示会、工場見学等を主催することによって広く学内外にもものづくりへの関心を高めることに貢献した。このように自チームの運営だけでなく、自動車技術会主催の各種イベントへの協力、学生主体の合同走行会等の主体的な企画・運営等、学生フォーミュラ大会参加チーム全体のレベルを向上させた貢献が高く評価された。

■本件問合せ先:本部学生支援課 山形(内線:22514)

# NEWS

## 日本翻訳文化賞受賞

柴田元幸  
大学院人文社会系研究科・文学部 教授



人文社会系研究科・文学部の柴田元幸教授（現代文芸論）が、今年刊行されたトマス・ピンチョンの『メイスン&ディクソン』（上下、新潮社）の翻訳により、第47回日本翻訳文化賞（日本翻訳家協会主催）を受賞されました。

この米国の作家ピンチョンの長編小説は、＜メーソン＝ディクソン線＞で知られる、いずれも実在した天文学者チャールズ・メイスンと測量士ジェレマイア・ディクソンが行った測量の旅の日記が元になっているそうです。ところが小説で語られる線引きの旅というのがまさしく珍道中で、とりわけ登場人物たちの素っ頓狂な会話が笑いを誘います。史実を想像力でコミカルな逸話に満ちた壮大なファルス（笑劇）に変えた作者もすごいです。そのユーモアを苦労したとはいえ日本語にした訳者も大したものであり、翻訳文化賞の受賞はその功績にふさわしいと言えるでしょう。

## 一般ニュース



### 本部学生支援課



「東大野球場」の文化庁登録有形文化財（建造物）への登録完了

弥生キャンパスにある東大野球場が文化庁登録有形文化財（建造物）に登録されることが平成22年9月10日付の官報で公告された。登録の詳細については以下の通り。

登録対象建物：東京大学野球場観覧席・ダッグアウト及びフェンス

観覧席の構造：鉄筋コンクリート造、3階建

建設年代：1937年（竣工式 昭和12年10月26日）

東大野球場は、安田講堂の設計で著名な内田祥三（よしかず）氏（のちの東大総長）が営繕課長の立場で、震災復興事業として本学の多くの施設の建設を主導されていた時に、営繕課によって建設されたものである。バックネット裏に設けられた更衣室等に利用する建造物とその屋根を利用して設けられた観覧席（600人収容）は、当時としては東京六大学随一の設備であった。特に、当時の野球場としては観覧席に屋根をつけること自体珍しく、バックネット裏の観客席につけられた半円型状の屋根を鉄筋コンクリート造のアーチ構造によって支えるという、当時としては先進的なモダンデザインである。ゴシック様式の建築家として知られる内田祥三氏の建築思想を理解するうえでも、震災復興期の鉄筋コンクリート造によるアーチ構造のモダンデザインの例としても、貴重な建造物である。本学の建造物としては10件目、野球場施設としては全国初の登録となる。



文化財登録された東大野球場



## 本部奨学厚生課

### 学寮・国際学生宿舎で寮祭を実施

9月26日(日)、本部奨学厚生課所管の学寮・国際学生宿舎において、寮祭が実施された。

あいにくの小雨模様の中、18時から豊島国際学生宿舎の共有スペースである各コモンにおいて、豊島学寮・豊島国際学生宿舎合同で「寮祭」が行われた。

この寮祭は、毎年宿舎生、寮生及び近隣の方々とコミュニケーションを図ることを目的として開催しており、今年度は、隣接する豊島学寮が9月末日に閉寮するため、最後の合同寮祭となった。学寮の調理師による料理の他に、宿舎近辺の巣鴨地藏通り商店街の名物お菓子や、寮生・宿舎生手作りのケーキなども用意され、皆美味しいように、ほお張っていた。

日頃からお世話になっている近隣の方々など、多くの方の参加があり、交流を深める良い機会となった。

また、今年度より新たな試みで、寮祭を2部制とし、10月下旬には、有志による研究や趣味の発表が中心となる発表会を実施した。



学寮の調理師が作ったカレーを美味しくほお張る宿舎生(豊島国際学生宿舎)



寮祭で行われたビンゴ大会(豊島国際学生宿舎)



## 学生相談ネットワーク本部

### 「コミュニケーション・サポートルーム」開設

10月1日付で、学生相談ネットワーク本部に「コミュニケーション・サポートルーム」を開設した。

ここは、学生の皆さんが自分自身のコミュニケーション能力に関する悩み、注意力の問題、他の人と違う考え方・感じ方に関する悩みなどについて相談する窓口である。自分の悩みがアスペルガー症候群や注意欠如多動性障害(ADHD)などに関係があるのではないかとという相談にも応じている。【※】

学生から話を聞き、必要な場合には心理検査などを実施することで、自己理解を深め、どのような方策が良いのかを一緒に考える。たとえば、苦手な領域を単純に克服していこうとするのではなく、他の方法でカバーできないかを探るといったやり方である。解決策が直ぐに見つからない場合もあるが、関係する機関に紹介するなど可能な範囲でお手伝いする。

また、保護者の方や教職員の方々がこのような学生にどう接したらよいかの相談もお受けしている。

ぜひコミュニケーション・サポートルームをご利用ください。

<コミュニケーション・サポートルーム>

場 所：安田講堂2階

(安田講堂北側「ローソン前」入口)

連絡先：03-5841-0839 (内線 20839)

【※】アスペルガー症候群は、仲間関係が苦手、他者の感情や思考の理解が苦手、興味や関心事を周囲と共有しにくい、などの特徴がある。注意欠如多動性障害(ADHD)は、多動、不注意、衝動性が特徴。青年期から成人期では、整理整頓が苦手だったり、忘れ物が多かったりなど、不注意に関係する特質が目立つ。

学生相談ネットワーク本部 ホームページ

<http://dcs.adm.u-tokyo.ac.jp/>



写真左から、小島憲道理事(副学長)、渡邊慶一郎室長、古田元夫本部長



コミュニケーション・サポートルームにて



春季リーグにおける濱田総長の始球式

本部学生支援課  
硬式野球部、神宮で勝利



10月2日(土)、東京六大学野球秋季リーグ、本学対早稲田大学戦が神宮球場で開催され、硬式野球部が2年ぶり36試合目に4対2で勝利した。

早稲田大学の通算30勝目前の斎藤佑樹投手から勝利をつかんだこともあって、本学応援席は大いに盛り上がり、応援部では勝利したときだけに行う伝統の「勝利の拍手」を徐々に披露し、本学関係者、OB始め観客が一体となって勝利に酔いしれていた。

初完投勝利を経験した鈴木翔太投手(文Ⅲ)は1年生で、今後の活躍が期待される。

また、今年度は本学が当番校として始球式を担当し、春季リーグでは濱田総長、秋季リーグでは小島理事(副学長)がマウンドに立った。いずれもストライクゾーンのミットに収まり、その瞬間、観客席からは大きな歓声が沸き起こった。



秋季リーグにおける小島理事(副学長)の始球式

本部研究推進課  
平成22年度「東京大学稷門賞」授賞式が挙行される



平成22年度「東京大学稷門賞」の受賞者が、五十嵐昌子様、JX日鉱日石エネルギー株式会社代表取締役社長木村康様、サントリーホールディングス株式会社代表取締役会長・代表取締役社長佐治信忠様、他個人1名の4件に決定し、授賞式が10月5日(火)17時30分から鉄門記念講堂において挙行された。本表彰は、私財の寄附、ボランティア活動及び援助等により、本学の活動の発展に大きく貢献した個人、法人又は団体(現に在籍する本学の教職員及び学生は原則として対象外)に対し授与するもので、平成14年度より毎年度行うこととしている。授賞式においては、選考結果の報告、各受賞代表者への表彰状及び記念品の贈呈があり、その後、総長の挨拶、受賞者からの挨拶が行われた。また、授賞式に引き続き、レセプションが行われ、受賞者及び受賞関係者と本学関係者との懇談が和やかな雰囲気の中で行われた。受賞者の授賞理由は以下のとおりである。



応援部による勝利の試合終了後のエール交換

◎ 受賞者

1 五十嵐昌子様

受賞理由：故・五十嵐邁博士が収集した学術資料（約10万点のチョウ類標本、1,000点を越える学術図書や描画等）の総合研究博物館への寄贈について、同博士の収集物には希少種の標本や、世界的な大図鑑などに使用された原図等も多く含まれ、その寄贈は本学における研究に大きく貢献するのみでなく、一般に公開することにより社会教育にも資するものであることが評価された。

2 J X日鉱日石エネルギー株式会社代表取締役社長  
木村康様

受賞理由：新日本石油株式会社（現：J X日鉱日石エネルギー株式会社）との産学連携により平成17年から実施されている新たな連携研究活動（トライアル連携）及びエネルギー問題の総合研究拠点整備へ向けた「先端科学技術研究センター新3号館」建設費用の寄附について、同センター新3号館の竣工（平成23年3月頃）の目途が立っていること、また連携活動の中で世界に先駆けて新型の太陽電池の開発に成功する等の成果が挙げられていることが評価された。

3 サントリーホールディングス株式会社代表取締役  
会長、代表取締役社長 佐治信忠様

受賞理由：サントリーホールディングス株式会社による総括寄付講座「水の知」（平成20年4月設置、5年間）は、社会的課題である水環境問題を産官学連携により解決方法を研究し社会発信していくために設置された。研究面の業績に加えて、教養学部生向けの講義を実施したり、キャンパス公開に併せたシンポジウムを連続開催する等、教育や社会発信の実績も顕著であることが評価された。

4 個人（受賞者の意向により非公表）



五十嵐昌子様及び推薦部局関係者、総長との記念撮影



J Xホールディングス株式会社代表取締役会長 西尾進路様  
及び推薦部局関係者、総長との記念撮影



サントリーホールディングス株式会社常務執行役員 小嶋幸次様  
及び推薦部局関係者、総長との記念撮影

地球観測データ統合連携研究機構 (EDITORIA)

一般

気候変動適応に挑む、「第7回 GEOSS アジア水循環会議」開催！

10月5（火）・6（水）日の両日、本学駒場Ⅱキャンパスにある、生産技術研究所 An 棟三階大会議室において、全球地球観測を利用したアジア水循環イニシアティブ（GEOSS/AWCI）の第7回国際調整委員会が行われた。当機構の小池研究グループと宇宙航空研究開発機構アジア推進室、土木研究所水災害・リスクマネジメント国際センターの三機関が共催し、国連大学、アジア太平洋ネットワークなどの支援・協力を得て開催したものである。

「アジア水循環イニシアティブ」とは、アジア地域に共通する様々な水問題を解決するために、全球地球観測（GEOSS）から創出される価値のあるデータを利用して、アジアにおける統合的水資源管理を推進しようという取り組みである。当機構の小池俊雄教授（工学系研究科）がこのプロジェクトの代表を務めている。

\* AWC I のプロジェクト概要、および、本会合のURLは、以下のアドレスより、ご参照ください。  
<http://monsoon.t.u-tokyo.ac.jp/AWCI/index.htm>

現在、アジア・オセアニア地域から20カ国が参加メンバーとなっており、今回第7回の国際調整委員会には、バングラディシュ、カンボジア、インド、インドネシア、韓国、マレーシア、モンゴル、ミャンマー、ネパール、フィリピン、タイ、ウズベキスタン、ベトナムの13カ国から、気象局、水文気象研究所などの政府組織の高官、および大学・研究機関から教授・研究者など、各分野における各国の専門家が招聘され来日した。二日間の参加者数は、延べ80名に達した。



GEOSS アジア水循環イニシアティブ  
メンバー国（現在20カ国参加）

国土交通省がその週の後半に開催を予定していた「アジア太平洋地域におけるインフラストラクチャー大臣会合」に先立ち、大臣会合での企業展示パネルも、本会議中公開され、研究機関以外の企業における「水」への取り組みなどに、ポスター見学をする機会を得た。

第一日目は、洪水、渇水、水質汚染、氷河湖決壊のテーマ別に分かれた各ワーキンググループから、どのように気候変動適応に立ち向かうことができるか、に焦点を当て、各国の研究成果、取り組みの現状などを詳細にご報告いただいた。続く第二日目は、気候変動の評価と適応について、現在進行中の実行計画とその準備状況などについて、宇宙航空研究開発機構、国土交通省、国際協力機構、気象庁などの各機関より、研究成果が紹介された。今後も、日本を含むアジアの各国が協力してデータ共有を行い、そうした貴重なデータから、アジアの人々の暮らしや社会に役立つ情報を創出する枠組み作りをさらに推進しているところである。また、アジアでの成功事例を基に、同様の水問題を解決するために、さらにアフリカ大陸へ展開するなど、地球観測データを利用した当機構の水循環に関する取り組みには、ますます大きな期待が寄せられている。



AWCI-ICG 全体グループ写真

なお、本件についてのお問い合わせは、地球観測データ統融合連携研究機構事務局までお願いいたします。

電話 03-5841-6132（内線 26132）

E-mail: editoria@editoria.u-tokyo.ac.jp

↑
海洋アライアンス

一

小学校にて出前授業開催

10月7日（木）、板橋区立中台小学校（渡邊和子校長）で海洋アライアンスによる出前授業が行われた。当日は学校公開日だったこともあり、2年生の児童43名の他、保護者も参観しての授業となった。講師は海洋アライアンスの福島朋彦特任准教授。国語の授業で学習中の「サンゴの生きもの」に出てくるクマノミやホンソメワケベラなどの生態をクイズやゲームを取り入れながら紹介した。

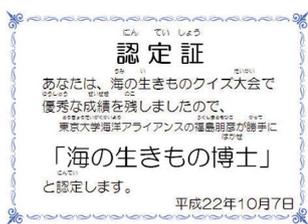
当日は、保護者の参観も手伝ってか、授業開始から子供たちは元気一杯であった。教科書に出てきた生き物が出題されると大きな声と共に一斉に手が挙がり、その他の生き物でも予想もしない生態が紹介されると、目を丸くして驚いていた。子供たちを見ていると答えを知る度に対象となった生き物への興味が深まっていくようであった。



一斉に手を挙げる子供たち

授業の後半に行われた班別対抗のゲーム大会は大変な盛り上がりを見せた。与えられたヒントから生き物を推測し、該当する生き物カードを選んでくるゲームで、子供たちは班の友達と協力しながら懸命にカードを探していた。意外なヒントが出されると後方からもどよめきがあり、保護者も一緒に楽しんでいることが窺えた。正解の生き物カードを取った班の子供たちは、講師から答えを聞くまでは不安に思っていたようだが、正解したと知った時には喜びもひとしおのようだった。そして、講師オリジナルの「海の生きもの博士認定証」を誇らしげに受け取っていた。

最後に「今日の授業はどうでしたか？」という質問に対し、たくさんの「楽しかった！」に混ざって「海っていいなあ」という声があがった。また、最後まで残っていた児童から「また来てください」とお願いされた講師は、安堵の表情を浮かべていた。この出前授業を通して子供たちが海への興味を深めてくれたことを実感した。



講師オリジナル認定証

海洋アライアンスでは、海洋生物や海洋資源など多岐にわたる出前授業を用意しています。詳しくは海洋アライアンスホームページをご覧ください。

海洋アライアンスホームページ：

<http://www.oa.u-tokyo.ac.jp/>

#### 本部入試課

「平成22年度学務研修会実務勉強会」を開催

一般

10月8日(金)、平成22年度学務研修会実務勉強会が、竣工間もない学生支援センター(本郷キャンパス)の2階大会議室及び3階ディスカッションルームを会場に開催された。

本部・部局で教育・学生支援業務を担当し、同業務に従事した年数がおおむね5年以内の者33名が参加した。

この実務勉強会は本学の教育・学生支援業務のあり方や求められる職員像について考える機会とするとともに、業務の円滑な処理に必要な基礎知識を習得させ、学生支援体制の充実と業務能力の向上に資することを目的に教育・学生支援部が中心となって毎年行っているものである。

開講式では教育・学生支援部の矢野由美部長から実務勉強会の趣旨説明がなされた。引き続き、午前中は学生相談ネットワーク本部精神保健支援室長渡邊慶一郎講師による講話「発達障害のある学生への支援について」

及び大学院総合文化研究科国際社会科学専攻山本泰教授による講話「東京大学の教養教育の特色について」が行われた。



渡邊慶一郎講師による講話の様子



山本泰教授による講話の様子

午後はグループに分かれて演習が行われ、前半は課題を中心に討議を行い、後半は受講者からあらかじめ提案のあった質問事項等について、テーマごとに意見交換が行われた。普段はあまり接することのない他部局の人達と熱のこもった議論の中で、様々な意見や考え方、他部局の状況を知ることとなり、アンケートの結果からも、今後の仕事を行う上で活用できると答えた受講者がほとんどであった。



演習での意見交換の様子



## 本部企画課

### 「明日の東京大学—危機に立つ財政」 説明会、開催される

10月12日（火）、安田講堂にて濱田純一総長と前田正史理事（副学長）による教職員・学生への説明会が行われた。16時に開始された説明会には、約400名の参加者（教員約40名、学生約30名、職員約330名）が集まり、質疑応答では、終了予定時刻の18時を20分近く延長するほど熱心な意見交換が行われた。

本説明会は、濱田総長による「東京大学の行動シナリオ FOREST2015」の説明から幕を開けた。「森を動かす。世界を担う知の拠点へ」の精神のもと、本学を更に発展させていくために、今後5年間に亘って取り組むべき課題への意欲が語られた。これに引き続き、高等教育への公財政支出が毎年減らされている厳しい現状や、本学の財政面の努力について、前田理事（副学長）からの説明が行われた。

その後、総長、理事の説明を受け、会場の参加者から、「財政難の中、どのようにして行動シナリオを推進するのか」、「奨学金や授業料減免にはどのように取り組むのか」、「研究について国民への理解を高めることが必要なのではないか」等の質問がなされ、そのひとつひとつに濱田総長と前田理事（副学長）が答えていった。「たとえどんな困難な情勢にあっても東京大学は教育研究のために行うべきことは行っていく」と力強く語る総長の姿が印象的であった。説明会の模様は本学のウェブサイトで紹介している。

[http://www.u-tokyo.ac.jp/gen02/b01\\_15\\_j.html](http://www.u-tokyo.ac.jp/gen02/b01_15_j.html)



濱田総長と前田理事（副学長）による説明（上）、  
会場からの質問に答える様子（下）



## 本部キャリアサポート課

### 博士・ポスドク対象企業説明会開催

10月15日（金）16時から浅野キャンパス武田先端知ビルを会場として、キャリアサポート室主催の博士・ポ

スドク対象企業説明会が開催された。

キャリアサポート室では、2005年に開設されて以来、学部学生、大学院学生を主たる対象として、卒業生との交流の場の提供、業界・企業について研究する場の提供、キャリアアドバイザーによるキャリア相談などのサービスを行ってきた。これらのうち業界・企業研究とキャリア相談についてポスドクにも積極的に就職に関する情報を提供するため、博士・ポスドクに特化したこのような説明会を開催している。

武田先端知ビル5階の武田ホールに出展11社の個別ブースを設置し、参加者はそれぞれのテーブルで企業の技術・研究者や人事担当者らと懇談する形式で、約170人が来場し、終了予定の19時ぎりぎりまで学生からの質問が続くブースもいくつも見られ、盛り上がりを見せた。



熱心にメモをとる参加者たち



## 学生相談ネットワーク本部

### 講習会「心をつなぐ工夫」（第4回、 第5回）を開催

平成22年度学生相談ネットワーク本部主催講習会『心をつなぐ工夫』－「第4回：最近の大学院生の特徴」が10月19日（火）に駒場Ⅱキャンパス先端科学技術研究センター4号館講堂において、本年度最終回となる「第5回：学生は学生相談所・精神科をどう利用しているか？」が10月27日（水）に柏キャンパス柏図書館メディアホールにおいて、それぞれ開催された。

第4回講習会では、駒場学生相談所の石垣琢磨教授による講義「東京大学駒場学生相談所の現状から見る最近の大学院生の特徴」が行われ、引き続き、駒場学生相談所の松島公望助教、杉山明子特任助教が加わり、演習（学生への対応についてのグループディスカッション）が行われた。演習では様々な意見交換がなされ、多様な学生に対応・理解するための知識取得の場となった。



(写真左) 石垣琢磨教授による講義 (第4回)  
(写真右) 演習の様子 (第4回)

第5回講習会では、高野明学生相談所講師による講義「学生は学生相談所をどう利用しているか」及び大島紀人精神保健支援室講師による講義「学生は保健センター精神科をどう利用しているか」が行われ、引き続き、質疑応答及び意見交換が活発に行われた。

参加者は、第4回が16名(5部局、教員6名、職員10名)、第5回が20名(4部局、教員8名、職員12名)であった。

学生相談ネットワーク本部では、従来から本学教職員に対して学生のメンタルケア能力修得を目的とした講習会を実施しており、本年度は「心をつなぐ工夫」に焦点を当て、毎回異なるテーマを設けて5回開催した。教育・研究の場で学生指導にあたる教員、窓口で学生に関わる職員、そして学生対応に関心のある教職員の方々に、今後も講習会等の活動を通して学生対応への理解を深めていただきたいと願っている。



(写真左) 高野明講師による講義 (第5回)  
(写真右) 大島紀人講師による講義 (第5回)

☆本年度実施した全5回の講習会の内容や当本部の活動については、学生相談ネットワーク本部のホームページをご参照ください。

<http://dcs.adm.u-tokyo.ac.jp/>

#### 本部キャリアサポート課

#### 知の創造的摩擦プロジェクト第11回交流会開催

一般

10月23日(土)、駒場Iキャンパスコミュニケーション・プラザ南館において、知の創造的摩擦プロジェクト第11回交流会「語ることで、広がるキャリア」が開催された。

卒業生との交流を通して学生のキャリア形成支援を目指すこの大学主催のイベントも、2005年10月の本郷キャンパスでの第1回以来、毎年、本郷キャンパス、駒場キャンパスでの開催を経て第11回目となった。今回は5周年にあたり、約120名の卒業生と約320名の学生が参加

した。

開会にあたり小島憲道理事(副学長)から、かつて学生としてこの交流会に参加した学生が社会人となってこの交流会に参加するという循環が生まれていることは誠に喜ばしいことであるという感想が述べられた。また、濱田総長が掲げる「タフな東大生」について紹介があり、今は複雑な課題が数多くある時代であるが、その中でタフさを身に付けてほしいと大学側も考えており、そのため「多様な触れ合いのある環境を作り出す仕組み」に取り組んでいることの説明があった。そして本日の交流会はまさにこの考えに沿うものであり、学生のみなさんもこの場をきっかけに“人生の先輩方”との関係を築こうとチャレンジしてほしい、と述べて励まされた。



開会の挨拶をする小島理事(副学長)

第一部は中規模グループディスカッション、第二部は懇談会の二部構成で、13時から19時まで和やかな中にも熱のこもった会話が繰り返された。

交流会は、卒業生有志の集い「東京大学三四郎会」と本学学生サークル「東大ドリームネット」の協力・支援のもとに行われたものである。学生と卒業生がともに主体的に参画する「東大コミュニティ」ともいえるべき、交流の仕組みの熟成への道が開かれ、年輪を重ねて幹となるごとく更に発展することが期待される。



交流の輪



## 本部総務課

### 名誉教授懇談会の開催

10月26日(火)18時から山上会館において名誉教授懇談会を開催した。

名誉教授の方々166人がご出席され、学内からは濱田純一総長をはじめ、理事(副学長)、理事、監事、各部署局長等の関係者多数が出席した。

懇談会は、濱田総長の挨拶の後、吉川弘之名誉教授(元総長)の発声で乾杯があり懇談が開始された。

途中、有馬朗人名誉教授(元総長)の挨拶に続いて平成22年度の名誉教授称号授与者を代表して、数理科学研究科の岡本和夫名誉教授の挨拶があり、終始なごやかな雰囲気が続けられ、佐藤理事(副学長)の閉会挨拶をもって散会した。



(写真左) 挨拶をする濱田総長  
(写真右) 乾杯をする吉川名誉教授(元総長)



(写真左) 挨拶をする有馬名誉教授(元総長)  
(写真右) 名誉教授称号授与者の代表挨拶をする岡本名誉教授



なごやかな歓談の様子



## 総括プロジェクト機構

### 日本の航空100年「航空技術と航空安全」フォーラム、開催

10月27日(水)、安田講堂において、航空イノベーション総括寄付講座(以下CAIR)と航空技術協会の共催により、「日本の航空100年『航空技術と航空安全』」フォーラムが開催された。本年は日本での動力飛行から100年に当たり、航空安全を築き上げた歴史を振り返るとともに、世界的な経済問題、地球環境問題により新たな展開を迎える航空の将来を展望することを目的に開催されたもので、当日は、400名を超える参加があった。

冒頭、CAIR代表、鈴木真二教授(工学系研究科航空宇宙工学専攻)の挨拶の後、エアバス・ジャパン会長グレン・S・フクシマ氏による欧州での航空技術の変遷についての説明に続き、生物多様性条約第十回締約国会議(COP10)での講演のため来日中のエアバス本社上級副社長ライナー・オーラー氏により「環境に配慮した未来の航空機の姿」と題する講演があった。その後、日本航空技術協会講師、斎藤昌彦氏から、航空機整備に関する変遷と、最近の国際的な安全管理システムへの取り組みが説明された。

後半では、鈴木真二教授のコーディネートにより、パネルディスカッションが開催され、国土交通省航空局の島村淳氏、宇宙航空研究開発機構の張替正敏氏、日本航空機操縦士協会の中野計人氏、日本航空技術協会の斎藤隆氏より、行政、研究、操縦、整備の各分野での航空安全への取り組みが紹介されたのち、今後の技術動向、人材育成などの視点が、会場からの質疑を交えて議論され、参加者一同、安全への構築に向けた各分野のネットワークの重要性が確認され、最後に、日本航空技術協会会長、今井孝雄氏の挨拶により閉会となった。



エアバス本社上級副社長ライナー・オーラー氏による講演

CAIRでは国内の航空ネットワークの維持・活性化に焦点をあてた「日本の航空100年～日本の航空の明日を考える」フォーラムを12月7日(火)、引き続き安田講堂において開催を予定しています。詳細は<http://aviation.u-tokyo.ac.jp/>をご覧ください。

## 部局 ニュース

大学院理学系研究科・理学部

部局

サマー・リサーチ・インターンシップ  
プログラム (UTRIP) を実施

大学院理学系研究科では6月25日(金)から8月5日(木)の6週間にわたり文部科学省主導本研究科国際化拠点整備事業の一環としてサマープログラム、UTRIP (The University of Tokyo Research Internship Program) を実施した。「東京大学の行動シナリオFOREST2015」では学内の国際化推進を重要課題の一つとして掲げているが、本研究科でも多様性に富んだ仲間との異文化交流を通じて学生達の専門的・学術的想像力を活性化させることを教育目的のひとつとしている。従来も本研究科では海外の大学院生向けサマースクールを実施していたが、学部生(3、4年生)を対象としたものはUTRIPが初めてである。このプログラムでは東京大学や本研究科への留学に興味がある学生を招いて実際に講義や研究・実験を経験し、その良さを体験してもらうことを目的としている。

UTRIPの応募資格については多様性の確保を考慮して国籍や所属大学を問わず、また専攻も理学に限らず募集した。その結果一月余りという短い期間に13カ国約50大学から150名以上の応募があった。この中から選考によって20名の学生が選ばれた。彼らの国籍を見ると中国、香港、インド、インドネシア、タイ、バングラデシュ、シンガポール、英国、米国、そしてカナダと国際色豊かなものとなった。

本プログラムでは一研究室につきインターン生一名を受け入れた。期間中、参加学生は担当TAや受入教員の指導の下、各自の研究課題に取り組んだ。また見識を広げるために自分の専門分野を問わず6専攻全分野の英語による入門講座も受講した。正規プログラムに加えて参加学生の日本文化に触れたいという希望に応じ、日本語講座や盆踊りなど日本文化体験イベントも実施された。本研究科附属施設の日光植物園訪問を兼ねた見学旅行では、世界遺産日光東照宮の伝統美を堪能し奥日光の温泉も満喫した。

プログラムの総仕上げとして期間最後の二日間にわたり研究成果発表が行われた。そして最終日、山形俊男研究科長から一人一人に修了証が授与され42日間のプログラムは幕を閉じた。

【本プログラム詳細ウェブサイト】

<http://www.s.u-tokyo.ac.jp/oip/en/utrip2010summary/index.html>



朝風呂も体験した湯元温泉で



専門外の講義にも真剣に聞き入る参加学生



修了証を頂いてミッションコンプリート

生産技術研究所

部局

平成22年度自衛消防活動審査会「優良賞」を受賞

9月3日(金)、目黒消防署主催の平成22年度自衛消防活動審査会がダイエー碑文谷店駐車場において開催された。

この審査会は、目黒区内の事業所から1隊3名で構成された自衛消防隊が出場し、火災発生時の通報・連絡、消火器の扱い、屋内消火栓の操作・放水等、技術の安全性・正確性を審査することで、自衛消防技術の確認と意識の向上を目的としたものである。

生産技術研究所からは研究部隊として基礎系部門から指揮者:小山(半場研)1番員:椎原(吉川研)2番員:崔(中埜研)、事務部隊として指揮者:千葉(経理課)1番員:尾田(総務課)2番員:中竹(総務課)の2隊

が出演した。

今年の夏は近年稀にみる猛暑が続き、日中 35℃ を超す中での訓練は過酷だったが、限られた時間の中で密度の濃い訓練を行い、隊員同士の掛け声は研究所全体に響きわたるほどであった。その結果、審査会では事務部隊が優良賞をいただき、また研究部隊も存分に訓練成果を発揮することができた。

昨今の異常気象や震災、火災など、防災管理の必要性が高まる中、これをきっかけとして、所全体で防災意識を向上させていこう、今後も防災訓練等をとおして働きかけていきたい。

最後になりましたが、訓練にあたって機材の準備や消防署との連絡調整など様々な面でバックアップしてくださった皆様にこの場を借りて御礼申し上げます。



優良賞を授与された生産技術研究所自衛消防隊員

#### 大学院工学系研究科・工学部

#### 「安全実技体験研修」が行われる

9月24日（金）に、エムシーヒューマネッツ株式会社の研修指導により、「火災・爆発の怖さ」をテーマに安全実技体験研修を開催した。約2時間の研修を2回開催し、工学系等の教職員や学部生および大学院生など合計44名が参加した。参加者は、可燃性ガスの燃焼、粉じん爆発、断熱圧縮、静電気による着火現象など、説明を交えながら実験を体験した。

可燃性ガスの燃焼では、円筒形の燃焼容器による実験が行われ、上下方向で火炎が伝播する方向の違いにより燃焼が激しくなることや、金網による火炎伝播阻止などを体感した。粉じん爆発の実験では、クリーニングパウダーの粉じん爆発を体験し、身近なものにも粉じん爆発の危険性が潜んでいることを体感した。また、断熱圧縮の実験では、ティッシュペーパーをピストンに入れて、ピストン内の空気を圧縮し、その熱で着火させるという現象を体験した。

静電気による着火現象は、参加者に実際に帯電してもらい、人体に帯電した静電気が着火源になることを体感

した。また、静電気による引火性液体への着火や、エアゾールの噴射による帯電現象など、日頃の実験作業の中に危険が潜んでいることを体感した。

燃焼・爆発の危険性を実際に体感する機会は滅多にないため、参加者の感想も、「実物が分かりやすく、説明も分かりやすく、大変興味を持てた」、「身近な事例も多くあり、とても分かりやすかった」、「日常の勤務や生活の中で危険と隣り合っていることが確認できた、貴重な体験だった」など、大変好評だった。



断熱圧縮による着火の実演



人体帯電を体験する参加者

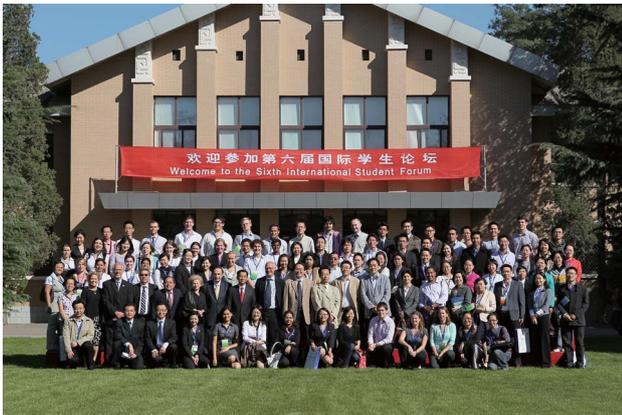


エアゾールの噴射による帯電を体験する参加者

9月26日(日)～28日(火)、中国科学院研究生院(GUCAS)の主催で北京にて国際学生フォーラム2010が開催された。本フォーラムは日・中・米・豪の4大学がコアメンバーとして持ち回りで主催しており、運営・進行等すべて大学院学生が中心となって行われている。優秀な大学院学生に成果発表の機会を与え、また会期中の交流を通じて学生同士互いに刺激し合う場として、毎年非常に有意義な結果を残している。

今年、本学(医科研及び先端研)からは8名の大学院学生が参加した。中国における反日運動の影響を懸念し、参加者には旅行中の行動について特別に注意喚起を行うなど緊張感もあったが、全員無事に発表を終えて帰国することができた。本学参加者からは、「今後の研究活動の糧となる大変貴重で有意義な経験であり、多くの刺激を受けた。多数の新しい友人たちと連絡先も交換し、ネットワークが広がった」との嬉しい報告を受けた。セッションの他、万里の長城やオリンピックスタジアムへの見学も日程に組み込まれており、初秋の北京を充分満喫したようである。

第7回目となる2012年は医科研が主催となる。本学を世界にアピールしつつ参加者から満足の声の聞ける素晴らしいフォーラムとなるよう、準備を始めている。



参加者集合写真



セッションの様子

教育学研究科は、年4回実施しているFD(ファカルティ・ディベロップメント)の会の今年度第2回目のテーマに「ハラスメントを防ぐために」を掲げ、9月29日(水)に赤門総合研究棟200番教室でFDの会を開催した。さらに、今回は教員だけでなく、事務職員に対する職場啓発を推進することにも取り組みを広げ、研究科としては初めての試みであるSD(スタッフ・ディベロップメント)の会として、FDとSDを合同で開催することとなった。

この合同の会は、武藤芳照教育学研究科長から「ハラスメントを多角的視点から考える有意義な会合とした」との挨拶で始まり、学外からの講師を含む次の4名の講師陣に登場していただいた。

(敬称略)

矢野 ゆき 人事部労務・勤務環境課専門員・ハラスメント相談所相談員

「事例から学ぶ」

上柳 敏郎 教育学研究科顧問弁護士、法学政治学研究科客員教授

「法律からみたハラスメント」

佐々木 司 教育学研究科教授

「精神保健からみたハラスメント」

川野 一字 NHKラジオセンター、ラジオ深夜便アンカー

「言葉とハラスメント」



開会の挨拶を述べる武藤芳照教育学研究科長

各講師からは、これまでの職務経験や専門分野の視点から、ハラスメントの実態、ハラスメントが及ぼす社会的・心理的影響、公共の場や対人関係において心がけるべき言葉遣い等に関して貴重な意見、助言を述べていただいた。

また、講演の後には、講師陣が壇上に並び、ハラスメントの防止に向けた手掛かり等について、参加者たちとの間で予定時刻を超えるほどの熱い討議が行われた。研究科としてFDとSDの会を合同で開催することは初めての試みであったが、参加した教職員そして講師からも、「面白かった」と、一つの課題を様々な立場から見つめて考えることの大切さを改めて知らされた会となった。なお、当日は、本部や他部局の職員の方々にも参加していただき、総勢60名あまりの会となった。



参加者と意見を交わす4人の講師陣

分子細胞生物学研究所  
 留学生サマースクールを開催

部局

10月1日(金)、日本文化に触れる機会を提供するために留学生対象の日帰りサマースクールを行った。

弥生キャンパスを朝7時50分に出発する強行軍であったが、好天にめぐまれ、日光での見学先をゆっくりまわることができた。参加者は中国、韓国、タイ、オ

ランダ、コロンビアなどからの留学生で、引率者を含め11名で、理学系研究科附属植物園日光分園、日光東照宮などを見学した。日頃なかなか行く機会が少ない所への見学であったが、英語のガイドさんもついて、たいへん勉強になる小旅行となった。



日光東照宮にて



大猷院にてガイドさんの説明を受ける参加者たち

大学院工学系研究科・工学部  
 「全学ゼミ」・「創造性工学プロジェクト」  
 発表説明会開催

部局

工学教育推進機構(工学系研究科・工学部)では教養学部前期課程1年から修士課程に至る6年間で、ものづくりによる創造性教育のために、1・2年生向けの全学自由研究ゼミナール、全学体験ゼミナールに引き続き、3・4年生向けの工学部共通科目「創造的ものづくりプロジェクト」、大学院修士課程向け共通科目「創造性工学プロジェクト」を実施している。

今年度夏学期実施の各プロジェクトの成果発表会及びガイダンスが10月4日(月)に本郷キャンパスで、10月6日(水)に駒場キャンパスで実施された。

工学部及び工学系研究科対象の科目は、創造的思考を基にした課題解決型の実験・演習による創造力、及びその過程におけるプロジェクト運営力、リーダ力および国

際力の涵養を目的とする。講義はいくつかのプロジェクトテーマからひとつを選び、必要な基礎講義を受けた後に実際に企画・設計・製作・実験・改良・発表を経験する。

4日の会では関村直人副研究科長より、このようなプロジェクトが工学系独自の教育プログラムであり、チームワークを発揮して考え抜く力を鍛える場として期待していることが述べられた後、担当の草加浩平特任教授の司会により、全11テーマの参加学生から成果が発表された。冬学期からは3テーマが追加になる。各テーマの内容は工学教育推進機構のホームページ (<http://ciee.t.u-tokyo.ac.jp/ciee/index-ciee.html>) に紹介されている。なお本科目では他学部、他研究科の学生に門戸を開放しているテーマもある。



創造性工学プロジェクト「e-learning project」の成果発表

またこの冬学期に工学部が提供するゼミは全学自由研究ゼミナールが13科目、全学体験ゼミナールが11科目あるが、従来開講されていた科目に加え、新任の先生方による新たな科目が増えていることが今学期の特徴であり、ものづくり活動を通じた人間力の向上が期待される。



全学ゼミ「ロボット競技を体験しよう」の成果発表

大学院薬学系研究科・薬学部  
「Harald zur Hausen 教授講演会」の報告

10月6日(水)15時20分から17時まで、薬学系研究科講堂において、ノーベル医学生理学賞を2008年に受賞された、Harald zur Hausen 教授の講演会が開かれた。本講演会は東京大学主催、科学技術振興機構共催、グローバルCOEプログラムである「医療システムイノベーション」「疾患のケミカルバイオロジー」及び「ゲノム情報に基づく先端医療」の協賛によるものであった。zur Hausen 教授はヒト子宮頸がんがパピローマウイルスの感染によって引き起こされることを発見し、ワクチンによるがん予防への道を切り開いたことで、がんの予防という人類の夢の実現に多大な貢献をし、現在はドイツがん研究センター名誉教授である。



講演中の zur Hausen 教授と長野薬学系研究科長

講演会は長野哲雄薬学系研究科長の挨拶で始まった。「Engagement of Infectious Agents in Human Cancers」というタイトルで行われた zur Hausen 教授のご講演では、まず、感染寄生体が21%のがんの原因であり、感染を防ぐことによりがんを予防できることが多くの癌に関して証明された経緯が述べられた。次に、ウイルス感染が大腸癌や小児のリンパ腫でも原因となりうることを、疫学的な背景とウイルスの解析結果などの、最近のご自身の研究に基づいて力説された。「常識を常識と思うな」という質疑の中に出て来たお言葉をご自身でも実践されているような研究姿勢を思わせ、感動的であった。



講演会の聴衆。質疑応答の最中で、スクリーンには医科学研究所からの質問者がリアルタイムで映し出されている

講演は医科学研究所講堂にビデオ配信され、薬学系研究科入村達郎教授の司会で行われた質疑応答にも医科学研究所からの積極的な参加があった。質疑応答では特に若い大学院生や学部学生からの発言が相次ぎ、30分あまりがすぐに過ぎてしまった。「科学者になるためにやるべきことは何か」の質問には「一つの領域にこだわってその中で業績をどんどん発表し科学者としてのアイデンティティを早く確立しなさい」ということであった。講演会開催の機会を頂いた科学技術振興機構、参加者登録受付、ビデオカンファレンスの設営、当日受付その他、部局を越えてご協力頂いた学内の皆様に、この場を借りて深く感謝申し上げたい。

#### 生産技術研究所

「外国人研究者・留学生との懇談会」  
開催される!

10月7日(木)16時より、駒場Ⅱキャンパスのユニバーシティ広場において、外国人研究者、留学生と教職員、日本人学生等との国際交流の促進を目的とした生産技術研究所主催の「外国人研究者・留学生との懇談会」が開催された。

本懇談会は、生産技術研究所の国際交流委員会、懇談会実行委員会、事務部国際交流チームの企画のもと、100人以上の教職員・学生ボランティアにより、例年通り国際色豊かな各国料理を屋台で提供する形式で行われた。今回は9カ国(フランス、スイス、トルコ、ブラジル、パキスタン、マレーシア、中国、韓国、日本)から全10件の屋台が出店され、各屋台には長蛇の列ができ、本場の料理やドリンク類、そして日本の生ビールなどを楽しみつつ、随所で国際交流を深める人々の輪ができた。

昨年は台風の影響により直前で中止を余儀なくされたが、今年は天候にも恵まれ、参加者は594名にもものほり大盛況の会であった。



懇談会風景



ブラジル屋台のメンバー

#### 大学院人文社会系研究科・文学部

第14回東京大学文学部公開講座が開催される

10月8日(金)に、大学院人文社会系研究科・文学部と北見市・北見市教育委員会との共催による第14回東京大学文学部公開講座が開催された。

この講座は、昼間の高校生を対象とした「常呂高校特別講座」と夜間の一般を対象とした「北見公開講座」とに分けて行っている。

「常呂高校特別講座」は北見市の常呂高等学校にて、柴田元幸副研究科長による「翻訳という仕事」の講演が行われ、在校生や一般の方々から多くの質問があり、予定時間を越えて終了した。

次に会場を北見市芸術文化ホールに移し、冒頭、旧常呂町(現北見市)と5年前に締結した遺跡・文化財及び地域に関する分野における両者間の協力を目的とした「地域間協定」を北見市との間で今後も継続することに合意し、小谷毎彦北見市長と小松久男本学大学院人文社会系研究科長による調印式が行われた。

引き続き、佐藤信教授による「世界遺産と日本史学」及び藤原克巳教授による「源氏物語に描かれた夫婦愛」の講演が行われ、両教授の熱のこもった講演に大勢の市民が熱心に聞き入っていた。

最後に、参加者からの提案により、常呂町との交流に

尽力された故藤本強名誉教授（考古学）の冥福を祈って黙祷をささげた。



(写真左) 柴田元幸副研究科長による常呂高校での講演  
(写真右) 小谷北見市長（左）と小松研究科長（右）による調印式



(写真左) 佐藤信教授による北見市芸術文化ホールでの講演  
(写真右) 藤原克巳教授による北見市芸術文化ホールでの講演

#### 大学院教育学研究科・教育学部

#### 留学生修学旅行で三浦・小田原・箱根を堪能する

10月13日（水）・14日（木）の両日、大学院教育学研究科・教育学部では、恒例の秋の留学生修学旅行を実施した。昨年に引き続き宿泊を伴う旅行で、参加者は留学生18名、武藤芳照研究科長をはじめとする引率の教職員6名の計24名であった。

時折、薄陽が差しこむ中、当初の予定通り8時に貸し切りバスは本郷キャンパスを出発。首都高速からレインボーブリッジ、ベイブリッジを抜けて神奈川県内に入った。やがてバスは三浦半島に入り、雨上がりで緑濃く見える木々が、淡青の空と濃紺の海に変わりゆくさまを窓外に楽しみつつ、最初の目的地である理学系研究科附属三崎臨海実験所へ到着した。

臨海実験所では、赤坂甲治所長のユーモアに溢れたプレゼンテーションを楽しんだ後、実験施設を見学し、海洋生物とじかに触れ合い、わが国のみならず世界における生物学の発展に多大な貢献をしてきた足跡に大きな感銘を受けた。特に実験所構内の湾で停泊中の実習船臨海丸では、デッキで爽やかな秋風をうけながら記念撮影に興じ、時折海面に光る魚影に留学生達は歓声をあげた。次に、実験所内の食堂での昼食を楽しみ、実験所をあげての歓待を名残惜しく思いつつも、徒歩で午後の最初の訪問先である油壺マリンパークへと向かった。まず、普段は一般の観客では見ることのできない施設の裏側見学ツアーを全員で楽しみ、次いで、各自の自由見学時間となり、イワトビペンギンや珍種のサメ、はたまたくつろぐにも程がある愛きょうたっぷりのカワウソなどの愉快

な水族達との出会いや、時折開催されるショータイムを満喫した。



理学系研究科附属 三崎臨海実験所  
海洋生物にも触れさせてもらった



赤坂所長に率いられ、採集調査船・臨海丸に体験乗船

その後、海岸線に沈みゆく太陽を眺めながら、バスは湘南海岸を小田原へ進み、日没前の小田原城で記念撮影ののち、宿泊先の箱根湯本温泉「雀のお宿春光荘」に到着。18時30分より、全員が顔をそろえての夜の宴となった。美味しい日本料理の数々に舌鼓を打つ一方で、飲み、楽しく語り、途中武藤研究科長の還暦前々夜祭というサプライズイベントを交えながら、和やかな雰囲気の中、参加者相互の親睦を大いに深めることができた。日本の伝統的な旅館のたたずまいと開放的な温泉は、多くの留学生にとってとても感動的であったようである。

2日目は、美しい秋晴れの中、9時に宿を出発し、日本各地に点在する湿地帯のみずみずしい植物が集められた箱根湿性花園に向かった。留学生たちは、希少な植物たちと出会いながらウォーキングをし、写真撮影などを楽しんだ。次に、バスは芦ノ湖に向かい、箱根関所跡から遊覧船による湖の周遊を行い、船の展望デッキからの箱根の山々の景観に息をのんだ。そして、昼食は、大パノラマの眺望で知られる十国峠へ。峠から眺めることができるはずの富士山はあいにく雲の中となってしまったが、ある者はロープウェイで上った展望台から、ある者は峠のおみやげ屋さんから、それぞれの心で見える富士は、実物以上に雄大であったかもしれない。



芦ノ湖を背景にジャンプ！

その後、バスは今回の旅行の最終目的地となる畑宿寄木会館へと向かい、箱根の伝統工芸品として有名な寄木細工を、職人さんの指導により体験し、コースターを作成した。職人さん顔負け？の美しい模様を作りだす者や、ありあまる芸術センスゆえか、難解な作品を作り上げる者など、十人十色の作品が生まれ、その出来栄を披露しあい、最後は各自の作品と記念撮影をおこなった。

帰路の車中は2日間の疲れでまどろむ者、まだ話が尽きず語り合う者など様々であったが、普段東京では見ることのできない様々な自然や生物を愛で、海と山の清澄な空気に洗われ、留学生たちは大いに心身をリフレッシュさせたはずである。やがて、渋滞に巻き込まれながらも無事19時過ぎにバスは本郷の赤門前に到着し、ここで2日間の修学旅行は解散となった。訪問先での体験という「財産」もそうであるが、それ以上に出身国の異なる留学生同士が、初めて出会い、語りあうことで、友達という「人財」を得ることができた大変有意義な留学生修学旅行であったと言えよう。

医科学研究所  
「慰霊祭」行われる

医科学研究所では、同附属病院で亡くなられ、病理解剖させていただいた方々の御霊をお慰めするために、10月14日（木）13時30分から医科学研究所慰霊祭を開催した。

式は、参列者全員による黙祷に始まり、献体者御尊名の奉読の後、清水元治所長が「御霊に捧げることば」を述べた。続いて、御遺族及び医科学研究所関係教職員が献花を行い、最後に、今井浩三病院長から御遺族に対して感謝のことばがあり、14時過ぎに滞りなく終了した。



「御霊に捧げることば」を述べる清水所長



御遺族への感謝のことばを述べる今井病院長

10月23日(土)に、経済学研究科棟第一教室にて、第10回東京大学東洋文化研究所公開講座が開催された。本講座は、東洋文化研究所が長年蓄えてきた知的ストックをもとにして、研究所スタッフがわかりやすく解説する、アジアを知るための公開講座で、2001年から年1回開催し、今年で10回目である。今回は『アジアの奇』として、菅豊教授による「中国の『奇』の文化誌」、板倉聖哲准教授による「奇想の源流—伊藤若冲が見た東アジア」、辻明日香助教による「奇跡譚に見るエジプトのイスラーム教徒・キリスト教徒像」の講演が行われ、293名にも及ぶ大勢の市民の出席を得、活発な質問・意見が寄せられた。



公開講座の様子

## 平成22年度 学内広報 発行スケジュール

号数	原稿〆切	発行日 (校了)	配布
1408	1月 6日(木)	1月 25日(火)	1月 31日(月)
1409	1月 31日(月)	2月 22日(火)	2月 28日(月)
1410	2月 28日(月)	3月 24日(木)	3月 30日(水)

学内広報にご寄稿の際は、以下のURLにある「記事提出要領」をご参照ください。  
[http://www.u-tokyo.ac.jp/gen03/kouhou\\_j.html](http://www.u-tokyo.ac.jp/gen03/kouhou_j.html)  
 【東京大学ホームページ】→【右下の学内広報アイコンをクリック】

### 問い合わせ先・原稿提出先

本部広報課 広報企画チーム  
 TEL: 03-3811-3393 内線22031  
 E-mail: kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp



## ニュースページ、 インフォメーションページ への記事提出要領

「学内広報」は皆さんから送っていただく記事で作られています。下記の提出要領により、積極的に学内の情報をお寄せください。

### 1. 提出方法

記事は、各部局の広報担当者を通して、メールの添付ファイルとしてデータで送付すること。

### 2. 締切日

本学HPの左下にある「学内広報アイコン」をクリックして発行スケジュールをご確認ください。

### 3. 提出の際の留意事項

#### (1) 文字数

文字数は記事1件につき800字を目安とし、内容により増減は可とする。

#### (2) 写真

- ① 写真を掲載する場合はキャプション(説明文)を25文字以内で添えること。
- ② 写真を電子データで提出する場合、Wordファイルなどに貼り付けず、jpeg等の形式による元の画像ファイルを送付すること。
- ③ 写真は電子データがない場合、プリントのものも掲載可とする。

#### (3) 書式

- ① 原稿は1行25文字の書式で作成すること(ただし、大きな図表などが含まれる場合は、この限りではない)。
- ② 原稿のはじめに担当部局名と記事タイトルを記載すること。
- ③ 記事タイトルは極力簡潔でわかりやすいものとする。

#### (4) 文章表現のきまり

- ① 句読点は「、」「。」を用いること(「,」「.」は用いない)。
- ② 時間は24時間表記とし、日付には括弧書きで曜日をつけること。
- ③ 記事内の人名は極力フルネームで表記。
- ④ この他、特に表記する必要のない「平成●年」は削除する、特に支障がない限り「東京大学」は「本学」とする等、表記統一のための修正を編集段階で行う。

※編集スケジュールの都合上、原則として校正はできません。基本的にはいただいた原稿がそのまま掲載されますので、内容に間違いのないようご注意ください。  
 ※原稿を受け取った後、学内広報担当者から必ず受領メールをお送りしています(概ね1週間以内)。返信メールが届かない場合、何らかのトラブルで原稿を受け取れていない可能性がありますので、お問合せ願います。

### 4. 問い合わせ先・提出先

本部広報課 広報企画チーム  
 TEL: 03-3811-3393 内線: 22031  
 E-mail: kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp



～総長通信～

# President's Improvisation

Vol.2

このコーナーでは、日々の活動の中で、総長が考えておられることを皆さんにお知らせしていきます



やるべきことをやり抜こう！

昨年から何かとニュースで報道されている「仕分け問題」。教職員・学生の皆さんも気になっていることと思います。今回はこの「大学とお金」という問題について少し話してみようと思います。

この問題に関しては、とにかく日本の将来にとって教育研究が大切であること、次代を担う人材育成、明日の社会経済を支える技術開発や基礎研究などの重要性を、粘り強く主張していくことが大事です。いま国の財政も厳しいために、中長期の戦略がないまま目先の政策に動きがちですが、東京大学は、これからの日本、そして世界にとって必要だと考える教育研究を、信念と戦略を持ってやり抜くべきだと思います。私は、これからの日本社会の最後の拠り所は大学だ、といつも言っています。

そこで頑張れるために、仕事の効率化や業務改善を着実に進めて、3つのS、つまり、「スリムな組織、スマートな運営、スピーディな業務」ということを、つねに考えてもらいたいと思います。とくに、これまで必要だと考えてきた仕事も、優先順位を付けて、思い切って切り捨てる工夫をすることも必要です。

教育研究では優先順位づけは難しい問題です。とくに東京大学は、時代のニーズに素早く応じるとともに、時代の動きに左右されないどっしりとした教育研究を続けていくことが、大げさなようですが、人類に対する責任です。そのような二兎を追う覚悟と効率化との兼ね合いは難しいのですが、その解決法は、教員に力の限り教育研究をやってもらうしかありません。個々の教員が、専門分野を深めるとともに、対応できる分野・課題の幅を広げて、学問の切り捨てをせずに行っていければと思います。そうしたことができるためにも、教員の「時間の劣化」を何とかしたいと思います。

財源の話ですが、大学というのは、間違いなく、未来の精神的・物質的な富を生み、またその富は社会や多くの個人に広く享受されていきます。つまり、当然にリターンはあるわけですから、無条件に基盤的な運営費用が保障されるべきだと思います。目先の対価性だけでは、とても世界と競争できる学術は育たないですね。それに加えて、さらに自分たちの努力で財源を見つけてくる、というのが、自然な形だと思います。

大学財政をめぐる動きに関して、教職員や学生の皆さんには、「とにかく、教育、研究、勉強と、やるべきことを一杯やり抜いて下さい」と言っておきたい。バタバタした日頃の動きは、ぼくら本部や部局長たちが頑張りますから。【談】

『東京大学の行動シナリオ FOREST2015』の中には、以下のような「経営の効率化」に関する達成目標が掲げられています。

### 重点テーマ別行動シナリオ

#### 8. 経営の機動性向上と基盤強化

達成目標  
■組織の見直しを不断に行い、効率化を図る。

しっかりと主張していきます！



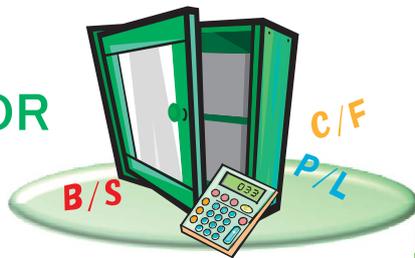
### 東大・国際協力機構（JICA）連携協定を締結

10月18日（月）10時から、東京大学と国際協力機構（JICA）は、開発途上地域への国際協力事業の質の向上及び国際貢献、学術研究及び教育の発展に寄与することを目的に、小柴ホールにおいて調印式を行い、連携協定を締結しました。

また、調印式に引き続き、同ホールにおいて、本連携協定の締結を記念して、濱田総長と緒方理事長の公開対談が開催されました。この対談の様子は、次号の総長通信拡大版でご紹介します。

# 決算のDOOR

～数字が語る  
東京大学



## 第2回 人材の価値は下がる？

前号で、「決算では我々職員はなぜ資産ではなく費用なのか」という質問をご紹介しました。では、実際に私たち教職員を「資産」と見なした場合どうなるか、考えてみましょう。まず、「資産」は時の経過とともに価値が減少していく「償却資産」と価値の変わらない資産に大きく分けることができます。人は土地や美術品と違って未来永劫その姿のままというわけにはいきませんので「償却資産」と見なし、「償却完了日」を定年の日として、採用から定年までの期間を「耐用年数」とします。毎月の給与は資産（教職員）の維持管理費と考え、さあ、気になる資産額は一体いくらでしょう？

答えは、回答不能・前提から不可能なのです。通常、建物やPCのような「償却資産」は新品で購入しても日を追うごとに劣化していき、いつまでも購入時のような機能は望めず、価値としては等しく減少していきます。人も年齢を重ねれば体力も記憶力も低下します。若作りはできても、残念ながら若いままではられません。ですが、採用1年目の職員と採用20年目の係長を比べてみてください。20年目の係長さんのほうが、日常業務の中で経験や知識が増え、大学への貢献度も増し、職員としての価値は上がっているはず。しかも価値の上がり方は千差万別。誰もが納得でき、正確さが求められる会計では、同じ物差しで測ることができない以上、「資産」として扱うことはできません。そこで、毎月支払われる給与を「人件費」と呼び、費用として扱っているのです。

ところで、この「人件費」、東京大学では昨年度の計上額が882億円でした。1,950億円の業務費のうち人件費の占める割合は約45%。サービス業の一種でもある大学は、人件費が大きなウェイトを占めます。それでも「ええっ、そんなに高いの!？」と驚かれた方、下の表をご覧ください。こちらは21年度の業務費に対する人件費の割合を大学別に示したものです。この数字が高ければ高いほど、(人件費以外の)教育研究活動にかけられる経費が少なくなることを意味しています。もちろん、大学が収益事業でないこと、単科大学、総合大学、人文系、理工系など大学それぞれの特性もあり、簡単に比較できませんが、東京大学が決して人件費に多く財源を割いているわけではないことがお分かりいただけたでしょうか。

	人件費比率(%)
東京大学	45.2
A工業大学	56.5
B教育大学	75.4
C総合大学	69.8

厳しくなる財政状況、多様化するニーズ、時代とともに大学が置かれている状況は変化していきます。でも、そこで働く人材は会計上では「資産」ではなくても、「人財」ともいうべき大切な

大学の財産であることは、いつの時代も変わることはありません。ただし、それには「遊休資産」と呼ばれぬよう日々の精進も必要ですが…。

さて、次号は大学の本当の「お宝」をご紹介します!(青)

このコラムへのご意見、ご質問をどしどしお寄せ下さい。お待ちしております!

本部財務部決算課

E-mail: kessan-g@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

# FOREST NOW

行動シナリオの「今」をレポート

早くて便利で低コスト  
～複合機から広がる可能性～

行動シナリオの重点テーマ8「経営の機動性向上と基盤強化」の中に、「事務・事業の見直しを徹底し、経費の一層の節減を図る」という達成目標が掲げられていますが、とても身近なところで経費節減の工夫が始まっています。今回は、複合機(※)に関連した取り組みをご紹介します。

調達本部・情報システム本部では次期「情報入出力運用支援サービス」の調達(平成23年4月開始)に向けて、仕様の策定を進めています。「情報入出力運用支援サービス」とは、(1)情報入出力(複写等)業務について「役務サービス」として複合機でのサービス(コピー、FAX、プリント等)

(2)その利用のための支援を受けるサービスのことで。

来年度から始まるサービスの最大の特徴は、コピーやプリントアウトする際に「ICカード認証」ができるようになることです。ICカード認証を利用することで、さまざまな業務改善が図れます。以下、いくつか例をご紹介します。

(※)複合機とは、コピー、FAX、プリンタなど複数の機能を一台にまとめた機械のこと。

### ミスプリを減らせます

「あっ、間違えてプリントしちゃった!」のミスプリントも、ICカード認証方式ではプリントせずにキャンセルできます。

ICカードをかざし(認証)、プリントボタンを押すまで、プリントは始まりません。認証後にファイルを選択してプリントするので、誤って印刷命令をかけてしまった文書も複合機のパネル操作で簡単に削除できます。



### 機密書類が守れます

ICカード認証機が付いた複合機で印刷をする時は、認証機に職員証等のICカードをかざします。自分のPCから印刷命令をかけた場合、複合機のところまで行って認証機に本人の職員証をかざすまで印刷はされません。ですから複合機を共用していても機密書類を安心して印刷できます。

### プリントを探す「無駄」がなくなります

排出トレイに放置プリントが積み重なって、自分のプリントを探したことはありませんか？

ICカード認証導入により、複合機のパネルで自分のファイルを選択してプリントするので、プリントの責任が明確となり、複合機のまわりに紙が散乱するという光景が無くなります。



以上、簡単ですが複合機をめぐる業務改善の工夫をご紹介しました。次号も引き続き複合機による業務改善の可能性に迫ります。お楽しみに!

### 行動シナリオを読もう!

<http://www.u-tokyo.ac.jp/scenario/>

【お問い合わせ先】本部企画課(内線22393)

※この連載では、政策ビジョン研究センターが現在最も重要視しているトピックスを中心に、そのときどきのホットニュースを、当センターの取り組みの様子、活動状況などと共に紹介していきます。

## 高齢化社会の新たな社会モデル ネガティブ思考から ポジティブ思考へ

高齢化という社会の変化には、「光」と「影」がありますが、従来、ネガティブな側面だけが強調されてきたきらいがあります。たしかに、平均年齢の伸び、すなわち高齢化は、これまでにない規模とスピードです。しかし、平均年齢だけでなく、健康年齢も伸びている事実については、これまであまり積極的に言及されてはきませんでした。

今回ドイツ科学技術アカデミーと共催した第1回日独高齢化社会国際会議では、基本的な認識として、「社会の高齢化 (aging)」を、「長寿化 (more life)」と捉えるなど、高齢化について、社会の認識や考え方を必要がある (ネガティブな思考からポジティブな思考へ) として意見が一致しました。長寿化は文化、社会の深化がもたらしてきた結果であると考え、社会の構造・フレームワークをそれに合わせて変化させる必要があることを確認しました。

日独双方から、老年医学、心理学、数学、

情報学、物理学、法学、政治学、イノベーション学、サステナビリティ学、多様な産業技術など、多彩な分野の研究者が集まり、新たな社会モデルの構築に向けた領域横断的な議論を行いました。その結果、「社会の高齢化」またはそれに関する学問領域である「ジェロントロジー」は、多岐にわたる相互補完的な研究課題を多く含む領域であり、両国の研究協力の最も重要なテーマの一つであることを確認しました。



日独高齢化社会国際会議の議長を務めた坂田一郎教授

日独両国は、「社会の高齢化先進国」として同じバックグラウンドを有し、エビデンスに基づく次世代の社会モデル構築のために、双方のアカデミアが課題解決のために、協力して大きな貢献をしていく必要があるとの認識で一致しました。両国は協力しながら、それぞれアジア、欧州における研究ハブとなるべく活動していきます。

高齢化に関する問題点が類似している日

本とドイツが、共同で領域横断的なワークショップをスタートさせたことは意義深く、日独交流 150 年の友好の歴史に加えるべき価値のあるものであることが確認されました。今後、重点トピックスを選定し、「第 2 回ワークショップ」を来年ドイツ (ベルリン) において開催することで合意しています。

### 第1回 日独高齢化社会国際会議

1st Japan-Germany International Workshop on Aging Society

- 日時：10月5日 (火)
- 場所：京都ホテルオークラ
- 主催：東京大学  
ドイツ科学技術アカデミー (acatech)

#### 主な論点

- ① 社会イノベーションによるアクティブエイジング社会への移行
- ② 社会構造変革と経済成長の両立
- ③ e-health のような新たな仕組み導入を含めた、サステナブルな社会保障制度に向けた改革
- ④ 強力な市民後見体制の構築、働き方の見直し
- ⑤ 高齢化に関する重要なエビデンスと認知機能等の改善を可能とする介入
- ⑥ ICT を利用した各種のサポート機能 (テレケア、スマートホーム等) の提供
- ⑦ SmartSenior Alliance プロジェクト
- ⑧ 地域社会と高齢化

### 会議議事録より

## 加齢による変化と可能性

高齢化は私たちと社会にどのような変化をもたらすのでしょうか。今回の会議では、身体・認知機能やパーソナリティへの影響など加齢による変化と社会的対応策についての研究報告が行われました。高齢化を高寿命化と捉えるなど、ポジティブな面もあることを踏まえて新たな社会モデルを構築する必要があります。

### 身体・認知機能・パーソナリティ

高齢者は新しいものに対する感受性が衰えていくとされています。しかし、こうした高齢者のパーソナリティは修正することができるとの観点から、事前に運動トレーニングを行うことによって、新しい経験が刺激となり、認知機能のレベルが向上するなど、成功につながった事例が挙げられました。加齢が進むにつれて、新たな知識を吸収する機能やスピードは衰えますが、積み重ねてきた知識や経験を活用する能力は衰えません。このように体の運動と思考の巡りは関連していること、認知機能と知識・経

験は補完し合い、修正しうるものであるといった報告がありました。

### 高齢化に対応する社会の仕組み

現在の死因の大半はかつてのような感染症ではなく、生活習慣病であるとされています。また、医学の進歩により、これまでは存在しなかった複数疾患を持つ患者が急増してきており、単一疾患ごとに対応している旧来の医療では対応しきれない状況になってきています。

しかし現状では、こうした疾病構造の変化や医療技術革新に、制度設計が追いついていません。医療制度は、労働人口になり得ない状態で何十年も生きる高齢者を想定していないため、社会保障費が増大してしまっています。

現実を正しく把握し、より効率的な医療制度、新しい公的システムを確立する

必要があります。

認知症などにより、資産を自分で管理することが難しい高齢者の資産が、日本には 10 兆円存在します。市民後見人のサポートによる財産管理や信託制度の整備、社会ネットワーク、雇用やボランティア等を通じ、社会との接続を保つことが求められています。

高齢化社会の新たな社会モデルを構築するためには、こうしたエビデンスを大事にしながら、多様な学術知識を統合し、活用していくことが必要です。



多彩な研究者が集まった高齢化社会国際会議 (10/5 開催)

## 産学連携本部組織のご紹介

# 事業化推進部



各務部長（前列右）と  
事業化推進部のみなさん

### 一事業化推進部の仕事内容を教えてください

事業化推進部は、本学の研究・教育成果の事業化・実用化を目指した起業・大学発ベンチャーの支援を担当しています。『東京大学知的財産ポリシー』では「東京大学は共同出願人、外部TLO等と連携して、東京大学に機関帰属する発明等が広く社会で活用されるよう努力する。（中略）また知的創作成果を遅滞なく社会へ還元するためのひとつの手段として、起業による発明の事業化も積極的に活用する」としています。具体的には、研究者や学生の起業相談に応じたり、インキュベーション施設である「東京大学アントレプレナープラザ」や産学連携プラザ内と駒場キャンパス連携研究棟のインキュベーションルームを運営・管理しています。さらに、学生起業家育成教育プログラムとして「東京大学アントレプレナー道場」を主催しています。今年度は6期目となり、これまで1,000名を超える学生が参加登録しました。6ヶ月間の教育プログラムで、最後はビジネスプランコンテストにより優秀チームを決定します。

### 一他大学と比べたベンチャー支援の特徴は？

本学のベンチャー支援の大きな特徴は、産学連携本部と、東京大学の“技術移転事業者”であ

東京大学の産学連携体制は、産学連携研究推進部・知的財産部・事業化推進部と産学連携課および密接な連携関係にある(株)東京大学TLO・(株)東京大学エッジキャピタルとによって構成されています。今回は事業化推進部の各務部長にお話をうかがいました。

る(株)東京大学TLOおよび、東京大学の“技術移転関連事業者”である(株)東京大学エッジキャピタル(UTEC)との密接な三者連携体制で取り組んでいることです。とりわけ2004年4月の国立大学法人化と同時に、東京大学独自のベンチャーキャピタルファンド運営会社として設立されたUTECの存在は東京大学のきわめてユニークな点で他大学にはないものです。UTECの「第1号ファンド」は、23の出資者より83億円を超える出資を得て、ベンチャー企業34社へ投資されました。また2009年7月31日付けで「第2号ファンド」も設立され(ファンド規模:約76.5億円)新たな投資が進展しています。

### 一ベンチャー支援の難しさ、またうれしさを感じる時は？

ベンチャー企業が成功できるかどうかは、実際に経営にあたる起業家によるところが大であることはいうまでもありません。もちろん資金・リスクマネーを提供するベンチャーキャピタルの役割、知的財産マネジメントの観点からTLOがプロフェッショナルとして提供するサービスは、ともにきわめて重要です。事業化推進部の役割は、大学内における起業環境を整備し、ベンチャー企業を成功に導く可能性を高めるためのインフラを構築することに力を置いています。ベンチャー企業それぞれの個別支援には、大学だけでは限界があり、常に隔靴搔痒の感があります。大学発ベンチャーといっても、東京大学が出資して株主となり、そのベンチャー企業の経営を直接するわけではありません。優れた技術を持つベンチャー企業が、当座の資金に困っている場合、大学は銀行を紹介できても、直接資金提供はできません。「東大メンターズ」という外部プロフェッショナルのネットワークをつくって、起業を目指す研究者や学生あるいはベンチャー企業経営者からの様々な問い合わせに対応できるようにはしていますが。

アントレプレナー道場を“卒業”した学生から、しばらくして起業したとの報告を受けた時は嬉しいです。すでに何人かの卒業生が起業しており、新たなイノベーションにチャレンジしようと一歩を踏み出したことを知ると、大変感激します。

## 第6期東京大学アントレプレナー道場、最終発表審査会・表彰式開催される

10月16日(土)、情報学環・福武ホール 福武ラーニングシアターにて、第6期東京大学アントレプレナー道場ビジネスプラン最終発表審査会・表彰式が行われました。4名の審査委員(影山和郎産学連携本部長、山城宗久産学連携本部副本部長、山本貴史(株)東京大学TLO代表取締役社長、郷治友孝(株)東京大学エッジキャピタル代表取締役社長)による厳選な討議の後、最優秀1チーム、優秀2チームが選ばれました(右下に詳細)。



今年の道場は、昨年度を上回る200名を超える登録者で初級コースが始まりました。初級ビジネスサマリーを提出し、中級コースに進出した学生は90名と半分に減りました。さらに中級ビジネスプランを提出し、上級コースに進出した学生は8チーム(24名)でした。今年度は、上級コースの日程が長くなり、発表の機会が増えたせいか、どのチームもビジネスプランの完成度が非常に高く感じられ、審査委員の方々からも、評価をつけるのがかなり難しかったとの感想が聞かれました。

表彰式の審査講評で、影山審査委員長が「アントレ道場は結果よりも過程が重要である。参加した学生さんは起業の有無に関わらず、ここでの貴重な経験を活かしてほしい」と述べられました。

### 参加チーム概要

- 【最優秀賞】「褥瘡予防システム」  
ISI (代表: ALIREZAEI HASSAN 情報理工学系研究科博士課程3年)
- 【優秀賞】「ネットワーク型オーナーサービス~農業の喜びを分かち合って暮らす」  
Re農 (代表: 福田 浩士 工学系研究科修士課程2年)
- 【優秀賞】「9マスの商品比較検索サイトによるモバイルECインターフェイス革命」  
mass9開発チーム (代表: 鈴木 稔人 情報理工学系研究科修士課程1年)
- 【次点】「より消費者ニーズに基づいた新たな中国人訪日観光ツアー事業」  
LINKER (代表: 崔 皓 工学系研究科修士課程2年)
- 「屋外トレーニング支援サービス『みんトレ』」  
チーム縁(よすが) (代表: 仙石 裕明 新領域創成科学研究科修士課程2年)
- ・「省エネのWA!」@S&Kプランニング (代表: 加地 健太郎 工学部3年)
- ・「CLOSET コーディネートをフィーリングで検索」  
Checkers6.0 (代表: 宮崎 航 教養学部4年)
- ・「グラスガーデン」グラスガーデン (代表: 谷本 征樹 農学生命科学研究科修士課程1年)

連絡先: 産学連携本部 (本部産学連携課)  
電話: 内線22857 (外線03-5841-2857)  
WEBサイト: <http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/>

DUCR 検索





# ケータイからみた東大 ～帰ってきた東大ナビ通信！～No. 5

## アメリカ大学事情 (4)

～教育へのテクノロジー利用を支援する組織がいかにして生まれたか

大学総合教育研究センターで助教をしております、重田勝介と申します。携帯電話を使った情報サービス「東大ナビ」を運営しております。今回は昨年度、私が客員研究員として研修出向をしておりまして、UC Berkeley ETS (Educational Technology Service) 設立の経緯についてご紹介いたします。

UC Berkeleyにおける教育のテクノロジー利用の黎明は、1960年代にまで遡ります。1961年に「Television Office (TV0)」という、テレビの教育利用を支援する部署ができたことが今のETSの原型です。当時UC Berkeleyでは若年層の人口増に伴い、学生数の飛躍的な増加が予想されていました。これに対応するため講義を別の教室に映像で流したり、講義ビデオを保存して再使用できるテレビが教育のツールとして注目されました。当時、大学にはこのような技術を扱える専門家はおらず、地元テレビ局に勤務していた専門家を招き、映像技術を扱う専門部署が作られました。これ以降、1970年代からは大型計算機の教育利用、1980年代には

教室でのパーソナルコンピュータの利用、1990年代にはインターネットの教育・研究利用が進み、学内では各領域・組織により、教育へのテクノロジー利用を支援する組織が多数作られました。これらを一本化することを目指して2001年にETSは作られましたが、こうなる経緯にはいくつかの要因がありました。

一つはコスト削減です。学内で同じようなサービスをいくつかの組織が同時に提供することは、大学全体で見れば無駄となりかねません。特にETSの設立が計画された1990年代後半は、米国でも経済状況が思わしくなく経費の削減が目指されました。当時の資料からも、学内で重複するサービスを一本化して効率を上げたいという意図が読み取れます。

また、学外からの要請もありました。米国の大学では定期的に「accreditation (基準認可)」が行われますが、1990年にUC Berkeleyは認可の条件として、教育への更なる注力と教育環境の整備が求められました。

UC Berkeleyはキャンパスの建物が古く大教室も多かったため、少人数

授業を行うことが当時から困難でした。そのため、テクノロジーを効果的に活用することで、学生がより学びやすい環境を作ろうとした側面もあったようです。

加えて重要だったのは、大学の学生や教職員に教育のための優れたサービスを提供すべきというヴィジョンを持った教員やスタッフの存在です。1990年代後半に、学内に散らばった様々なテクノロジーの教育利用を支援する組織を一本化し、学内の誰もが使いやすい「ワンストップサービス」を提供する組織に束ねるための委員会が持たれました。数年に渡る折衝の後に、学部教育と教育技術を専門に担当する副学長の下に直接統括される組織として、ETSが設立されました。

私はこのような研究を通じて、上のような熱意を持った多くの方々と出会う機会に恵まれました。このことが今でも、本学での業務を行うにあたって大きな励みとなっています。

本連載はこれで終了となります。最後までおつきあいいただき、ありがとうございました。

## 東大ナビとは？

学内外に向け携帯電話を通じて教育イベント情報をお届けするサービスです。携帯サイトで学術俯瞰講義や公開講座、学内で開催される教育イベント情報を宣伝します。加えて、QRコードや空メール送信によりメールアドレスを登録した皆様の携帯電話に、最新の教育イベント情報を、メールマガジンで定期的にお届けしています。

## イベント情報を受けたい方

mail@utnav.jpに  
空メール送信！  
■この記事のQRコードから  
■mail@utnav.jp宛てにメール送信  
■携帯サイトutnav.jpにアクセスしてメルマガ登録ページへ  
※携帯電話・PC  
どちらからも登録可能

返信メールから登録画面に入力！

- ご所属
- 性別・年齢など

登録完了！

- 登録確認メールが届きます
- 隔週でメルマガ・お得なクーポンGET!

## イベントを宣伝したい方

- 携帯・PCサイトで申し込めます
- http://utnav.jpにアクセス
- イベント掲載フォームから送信！
- 追ってスタッフよりご連絡致します

教育企画室TREEオフィスまで！

- 内線；27823（重田）
- メール；info@tree.ep.u-tokyo.ac.jp
- オフィス；本郷キャンパス 第二本部棟403号室





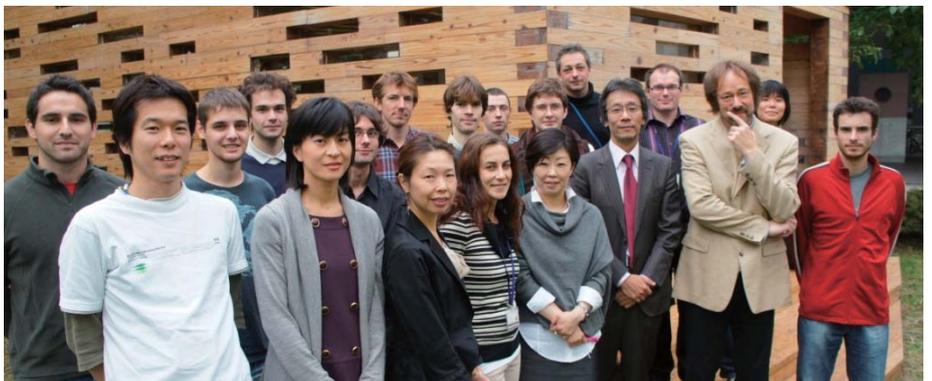
一見優雅に見えますが、(髪振り乱して) 研究員受入れ、研究契約、予算ハンドリング他、CNRSとの交渉業務を行うオフィス

## 今年で16歳になりました

朝、ボンジュールの挨拶が飛び交う私の職場の名前は、日仏国際共同研究室 LIMMS/CNRS-IIS(リムス)。今を去る事16年前、マイクロマシン分野で外国研究パートナーを探し求めていたフランス国立科学研究センター(CNRS)が、東京大学生産技術研究所に白羽の矢を立てて誕生した組織です。創立2年目から、研究員受入業務など日仏双方の運営事務に携わってきた私は、2003年にCNRSのキビしい?採用試験を経て正式にフランスの公務員となり、かの国からリムスに「赴任」しているという身分になりました。

ここでは日々様々な案件をすすめるにあたり、日仏の事務手法の違いが大きな壁となって立ちはだかります。しかも相手は同僚とはいえども、ザ・自己主張=フランス人。なんぼでもしゃべって、厭わずコミュニケーションに努め、違いを理解する事が解決のツボ。かくして私にとってのフランス語は「愛を語る言葉」ではなく、「戦うための言語」となってしまうのです。そして、彼らから学んだのは、「ユーモア」。どんなに手強い相手と戦っていても、良質のジョークと共に笑い、互いの懐に飛び込めればしめたもの、壁が氷解することもしばしばです。大和(撫子?)魂を持つジャンヌダルクとして、これからもしなやかな姿勢で国際共同研究活動の一端を担ってゆければと思っています。

一転して休日は、好きな落語を聞いて下町散策、電気ブランやワインでほろ酔い気分、隣に座ったフランス人観光客と笑い合い、「酒は世界の共通語」を楽しんでいます。



日仏両ディレクタ(藤井輝夫教授、ドミニクコラル特任教授)、研究室秘書さんと研究員一同、OBを含めると90名以上!  
(LIMMS HP: <http://limmshp.iis.u-tokyo.ac.jp/>)

### 得意ワザ:

海外出張時の時差ボケなし(天然か?)、駆けつけ一席(嘶)

### 自分の性格:

真面目(自称)、ひょうきん者(上司談)

### 次回執筆者のご指名:

小澤みどりさん

### 次回執筆者との関係:

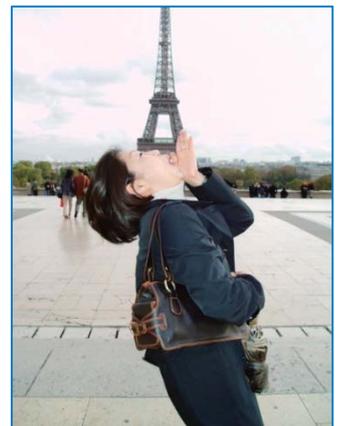
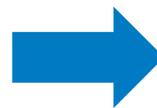
仕事もアフターファイブも、、、。

### 次回執筆者の紹介:

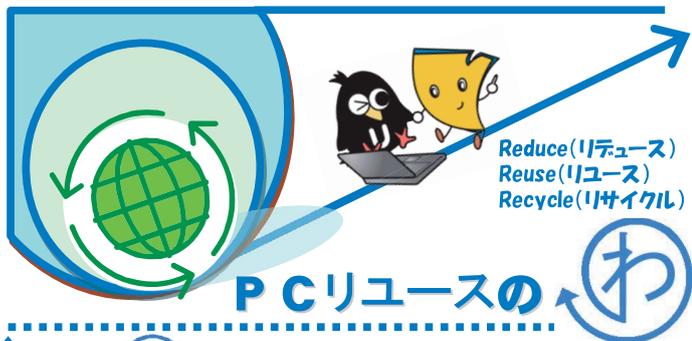
おしゃれな、国際交流のエキスパート。生研時代、リムスの無理難題にいつも快く冷静に対応してくださいました。



エッフェル塔を手に載せて……



……呑み込むパリジェンヌ!



## 第13回 PCにリユースのチャンス!

「このノートPCは故障しちゃったみたいだし、もう処分するかも手間がかかりそうだなあ。まあ処分は後で良いか。」・・・そう思ったまま忘れられているPCはお手元にありませんか?

本事業ではより多くの学生さんへリユースPCを貸与出来るよう、積極的に研究室等で不用になったノートPCの回収に努めています。不具合があるものでも部品を交換するだけでリユースPCとして使えるようになるものが沢山あります。

もちろん、どうしても再生出来ないものもあります。しかし、中の部品を他のPCの再生や修理に利用する事も可能です。以前学生さんへ貸与しているリユースPCに不具合が出てしまい、部品を交換しなければならない時がありました。その時、必要な部品がもうメーカーからも手に入らないという事態が発生してしまいました。しかし、回収したけれどPCとしては再生出来なかったものの中から必要な部品を調達する事が出来たのです。そのおかげで無事に学生さんへ修理したリユースPCを再び貸与する事が出来ました。



本事業は提供があつて初めて学生に供給できる事業です。「壊れてしまった、不用になった＝処分」ではなく「＝リユース」という考えがより浸透していけば、本事業も更に活性化すると思います。全てのノートPC達にどうぞ今一度リユースPCとして生まれ変わるチャンスを与えてあげてください。(高)

### ☆10月各部局ご提供PC☆

医学部 1台	工学部 19台
理学部 4台	経済学部 3台
教育学部 2台	情報理工学系研究科 8台
大気海洋研究所 1台	環境安全研究センター 2台

以上40台のノートPCは5回目の募集時に利用させていただきます。どうもありがとうございました。引き続きご協力お願いいたします。

- 問い合わせ先: ノートPCリユースオフィス  
(本部資産管理部資産課内)  
E-mail: pcreuse@adm.u-tokyo.ac.jp  
URL : http://pcreuse.adm.u-tokyo.ac.jp/  
内線: 22135(担当 小川・高橋・戸田)
- ノートPC回収先: 美津野商事株式会社システム事業部  
E-mail: reuse@mizuno.net (担当 川崎・石井)  
電話: 03-3943-0181 FAX: 03-3943-4180

## インタープリターズ・ バイブル

vol. 40



科学技術インタープリター養成プログラム

### ヒューマノイド

石原孝二

総合文化研究科 准教授  
教養学部附属教養教育高度化機構  
科学技術インタープリター養成部門

最近、ヒューマノイド関連のニュースを目にする機会が多くなってきた。ヒューマノイドがよく取り上げられるようになってきた原因としては、まさに、ヒューマノイド(人間型ロボット)と呼んでも差し支えないものが作られるようになったということがあるだろう。大阪大学/ATRの石黒浩教授や産業技術総合研究所などが最近作るヒューマノイドは非常に精巧に作られていて、人間と見まがうほどである。精巧なヒューマノイドの映像は非常にインパクトがあり、メディアの側もニュースとして取り上げやすいのだと思う。

ヒューマノイドだけでなく、ペトロットを含めて、実社会の中で人間と相互作用を行うロボットを最近では「ソーシャルロボット」と呼ぶこともあるが、そのようなソーシャルロボットの実社会への実装は、哲学的・認知科学的にいろいろと興味深い問題を提示する。人間は果たして完全に自律的なエージェントを作り出すことができるのだろうか。人間は人間や動物と同じような振る舞いをする人工物に対してどのような態度を示すのだろうか。また、ソーシャルロボットの導入は、人間同士の関係にどのような影響を与えるのだろうか。

実社会への実装という点から言えば、現在のヒューマノイド研究は、自律性の確保という点ではまだ大きな課題を抱えている。人間であるかのように見えるということと、人間と同じように振る舞うということの間には、越えたい大きな壁がある。ヒューマノイドやソーシャルロボットの産業化は一部始まりつつあるが、その産業化がどのような方向に向かうのかは、この壁を越えることができるかどうか、またそもそも越えるべきなのかどうか、という問題と密接に関係するものであろう。

現在、こうした問題に関連するテーマを科研費の研究で扱っているが、全体を見渡して未来予測を行うことはなかなか難しい。過去を振り返ってみれば、なぜ日本で(だけ)これほどヒューマノイド研究が発展したのかという興味深い問題があるが、これもなかなか一筋縄ではいかない。しかしそのことは、ヒューマノイド研究の過去と未来が、科学技術と社会・文化的背景との関係を考える上で、大変良い材料であるということを示しているのかもしれない。

★科学技術インタープリター養成プログラム

<http://science-interpreter.c.u-tokyo.ac.jp/>

## 読者投稿写真



総合研究棟、屋上より望む富士山・早朝



総合研究棟、屋上より望む富士山・夕刻

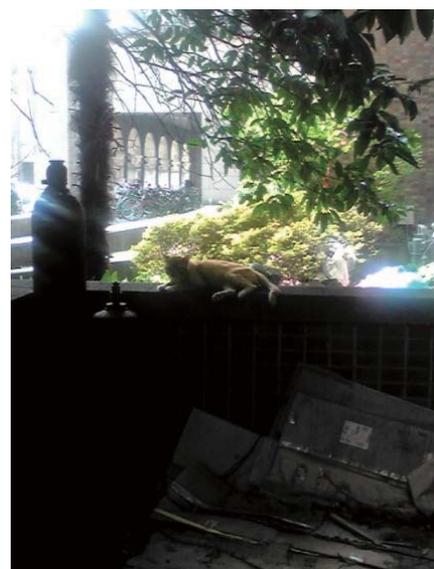


桜舞い散る



4号館裏手 見事な桜

(以上撮影者：医科学研究所 ヒトゲノム解析センター 速水晋也さん)



ぬくもり

コメント：東大にはたくさん猫が住んでいますが、病院内科研究棟裏、食堂カワナの近くで日差しがいい感じのワンショットが撮れました。

(撮影者：東京大学大学院医学系研究科  
疾患生命工学センター 森真弓さん)

みなさまからの  
投稿写真募集中！  
詳しくは次ページを  
ご覧ください！

— 特集テーマ & 執筆部署募集告知 —

## 特集の記事を 執筆してみませんか？

学内広報では巻頭特集の記事テーマとその執筆部署を募集しています。学内への周知を図るためのツールとして特集はとても効果的です。皆さんの部署でも、ぜひ特集の記事を執筆してみませんか？皆様からのお問い合わせをお待ちしております！

### 1. 制作方法

#### ① テーマの選定

特集は、全学の教職員を読者対象とするテーマを選定することになっています。まずは、本部広報課にお気軽にご相談ください。特集に馴染まないテーマでない限り、対応いたします。

\* 締切日の1カ月前位までに一度ご相談ください

#### ② 内容・構成の決定

テーマが決まったら執筆部署と学内広報編集スタッフ（以下、編集スタッフ）が打ち合わせをして、ページの内容を決めていきます。見開き2ページをひとつの単位とします。内容が盛りだくさんの場合は4ページ、または6ページで構成することもあります。

#### ③ 原稿の執筆・デザインの決定

決定した構成に合わせて、執筆部署に原稿を書いていただきます。写真・図・イラストなどを盛り込みながら、ページを作成してください。

\* パワーポイントまたはaiファイルでのご提出となります。

\* 学外または他部署のホームページ等から写真・図・イラスト等を転用する場合は著作権に十分留意し、必ず先方の許諾を得てからご使用ください

#### ④ 校正

編集スタッフとやり取りの上、文字校正を行なっていただきます。

#### ⑤ 完成

刷り上がった学内広報は、執筆部署に多めに配布します。

### 2. 締切日

あらかじめ、こちらから期日を申しあげますので、ご協力をお願いします。通常の学内広報の切日の数日前を原稿締切日とします。

### 3. 問い合わせ先・原稿提出先

本部広報課 広報企画チーム

TEL：03-3811-3393 内線22031

E-mail：kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp



## あなたの撮った 写真を学内広報に 載せませんか？

学内広報では、教職員の皆さんが撮影した写真を募集します。あなたも自らの写真の腕を学内で披露してみませんか？

#### ■ 応募条件

##### 1. 東大のキャンパス内で撮影した写真であること

本郷に限らず、東大の敷地内ならどのキャンパスでも可。また、キャンパス内で撮った写真であれば、風景写真でなくても可。人、動物、モノが写った写真でもかまいません。

##### 2. デジタルデータで送付すること

撮影はデジタルカメラ、あるいはカメラ付き携帯電話で行い、デジタルデータ（jpeg、tifのいずれか）をメール添付で送ってください。

##### 3. 1回の応募につき3枚まで受付

多量の写真データ送付はご遠慮ください。  
（添付ファイルの合計容量は5MBまで）

#### ■ 掲載基準 & 掲載方法

学内広報編集スタッフが独断と偏見に満ちた！？セレクションを行い、スペースの空いたページに掲載します。掲載の際には、「作品名」と「撮影者」のクレジットを記載します（匿名希望も可）。また、良い写真が多数集まった場合は、応募写真を紹介する特集、応募写真を紹介する連載なども予定しています。

#### ■ 締切

特にありません。良い写真が撮れたら送ってください。

#### ■ 送付先

本部広報課 広報企画チーム

「学内広報写真募集係」まで

E-mail：kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

# INFORMATION

## お知らせ

### お知らせ

大学院総合文化研究科・教養学部

「教養学部報」第533（11月4日）号の発行  
——教員による、学生のための学内新聞——

「教養学部報」は、教養学部の正門傍、掲示板前、学際交流棟ロビー、15号館ロビー、図書館ロビー、生協書籍部、駒場保健センターで無料配布しています。バックナンバーもあります。

第533号の内容は以下のとおりとなっていますので、ぜひご覧ください。

松田良一：エバンスブルー・日本脳炎・筋ジストロフィー  
宮下志朗：『デカメロン』の壁画を訪ねてライン河畔へ  
高田康成：ほとんどなんの感慨もなく  
古城佳子：駒場キャンパスの新しい国際交流支援体制—  
駒場I Oと国際センター駒場オフィスの紹介

〈本の棚〉

品田悦一：齋藤希史著『漢文スタイル』  
軽やかに越境する  
齋藤希史：品田悦一著『齋藤茂吉——あかあかと一本の道とほりたり』  
むなさがぬめら握らまく  
星埜守之：斎藤兆史・野崎敏著『英仏文学戦記——もつと愉しむための名作案内』  
英仏文学への誘惑の書

〈時に沿って〉

吉本敬太郎：距離感  
三ツ井崇：韓国文化をみつめる眼

学際交流ホール改装記念演奏会：

11月5日、学際交流ホール

### お知らせ

情報基盤センター

「自宅から検索するには？」(20分)ほか  
“情報探索ガイダンス”各種コース実施のお知らせ

レポート・論文・ゼミ発表で、文献探しや文献整理に困っていませんか？

情報基盤センター図書館電子化部門では、“情報探索ガイダンス”各種コースを実施しています。

実際にパソコンを操作しながら実習するので、わかりやすいと大変好評です。

本学にご所属であれば、学生・教職員を問わず、どなたでも参加できます。ぜひご参加ください。

※どのコースも自宅からの利用方法の説明を含みません。

■ 12/9（木）12:10～12:30 自宅から検索するには？  
(20分のワンポイント講習会)

自宅からデータベースや電子ジャーナルを使う方法だけ、知りたい。そんな方にお奨めなのが、このコース。ECCSアカウント認証によるSSL-VPN Gateway サービスを紹介します。

■ 12/15（水）16:00～17:00 文献検索早わかり

図書、電子ジャーナル、日本語論文（CiNii）、英語論文（Web of Science）、新聞記事など、各種文献の探し方を、まとめてコンパクトに解説します。

■ 12/17（金）15:00～16:00 RefWorksじっくりコース

初心者向けにゆっくりと、Web版の文献管理ツール「RefWorks」の基本的な使い方を説明します。データベースからのデータの取り込み方、参考文献リストの自動作成方法などを実習します。

■ 12/21（火）12:10～12:40

電子ジャーナルで論文入手（30分のクイック講習会）  
電子ジャーナルで目的の雑誌論文を入手する方法をコンパクトに解説します。

■ 12/21（火）15:00～16:00 はじめての論文の探し方

「文献検索は初めて」という初心者向けにゆっくりと、文献リストの読み取り方、図書、雑誌、日本語論文（CiNii）、英語論文（Web of Science）の基本的な探し方を実習します。（「文献検索早わかりコース」参加者は受講不要）

■ 12/22（水）15:00～16:00

知っておきたい検索のコツ【新コース】

どのデータベースを使えばいいかは知っている、意外と難しいのがキーワード検索。どのように入力すれば欲しい情報が効率良く見つかるでしょうか。データベースごとに、知っておくと便利な検索のコツを教えます。(扱うデータベースは当日の受講者により応相談。例：OPAC、CiNii、Web of Science、EBSCOhost、読売新聞、朝日新聞、医中誌 Web、PubMed)

月	火	水	木	金
		12/1	12/2	12/3
12/6	12/7	12/8	12/9 12:10-12:30 自宅から検索するには	12/10
12/13	12/14	12/15 16:00-17:00 文献検索 早わかり	12/16	12/17 15:00-16:00 RefWorks じっくり コース
12/20	12/21 12:10-12:40 電子ジャーナルで論文 入手  15:00-16:00 はじめての 論文の探し 方	12/22 15:00-16:00 知ってお きたい検 索のコツ	12/23	12/24



- 会場：本郷キャンパス総合図書館1階講習会コーナー
- 参加費：無料
- 予約不要 各回先着12名。直接ご来場ください。
- ご希望の日時・内容でオーダーメイド講習！  
オーダーメイドの講習会を、随時承っています。(無料)  
詳細は下記サイトをご参照ください。  
(<http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/shuccho.html>)
- Litetopi メールマガジン発信中！  
本学所属の方を対象に、データベースのニュースや講習会のご案内などをお届けします。配信ご希望の方は、下記アドレスまでメールでご連絡ください。(無料)



[literacy@lib.u-tokyo.ac.jp](mailto:literacy@lib.u-tokyo.ac.jp)

- お問い合わせ：  
学術情報リテラシー係 03-5841-2649 (内線：22649)  
[literacy\\*lib.u-tokyo.ac.jp](mailto:literacy*lib.u-tokyo.ac.jp)  
(\*は@に置き換えて送信してください。)  
<http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/training.html>

## 事務連絡

### 人事異動(教員)

発令日、部局、職、氏名(五十音)順

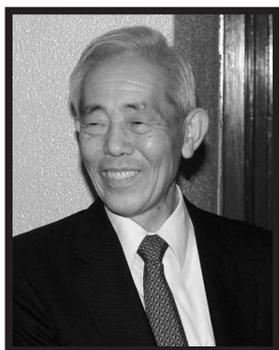
発令日	氏名	異動内容	旧(現)職等
(退職)			
22.10.31	俣野 哲朗	辞職(国立感染症研究所エイズ研究センター長)	医科学研究所附属感染症国際研究センター教授
(昇任)			
22.10.16	木宮 正史	大学院総合文化研究科教授	大学院総合文化研究科准教授
22.11.1	橋場 弦	大学院人文社会系研究科教授	大学院人文社会系研究科准教授
(配置換)			
22.10.16	白山 晋	大学院工学系研究科准教授	人工物工学研究センター准教授

※退職後又は採用前の職等については、国の機関及び従前国の機関であった法人等のみ掲載した。

東京大学における教員の任期に関する規則に基づく専攻、講座、研究部門等の発令については、記載を省略した。

藤本強名誉教授

藤本強先生は、2010年9月10日（金）に旅先のドイツにて突然倒れ、そのまま御逝去されました。享年74歳。先生は、昭和40年に文学部考古学研究室助手となり、北海道北見市に設けられた文学部附属北海文化研究常呂実習施設に、昭和45年初代の助教授として赴任されました。その後、昭和60年に文学部考古学研究室に戻ると共に教授に昇進し、平成12年に定年退官されました。この間の平成9年から11年には、文学部長／大学院人文社会系研究科長を務められました。その後新潟大学教授、國學院大學教授、早稲田大学客員教授などを務められ、平成13年からは（財）福島県文化振興事業団副理事長兼福島県文化財センター白河館長として活躍されておられました。先生の元々のご専門は西アジア考古学でしたが、考古学研究室が実施していた北海道での遺跡調査に学生時代から参加し、後に現地の専任教員として東京大学の北方考古学研究を牽引してその礎を築くと共に、この分野でも大きな業績を残されています。



その北方研究の延長上に、沖縄のような南の文化を加えた「もう二つの日本文化」という、日本列島の歴史を多角的に見る先生独自の歴史観が誕生しました。昭和60年に文学部に戻られてからは、その頃から開始された学内の埋蔵文化財調査の指揮を執り、初代の埋蔵文化財調査室長となり、現在の学内埋蔵文化財調査体制を確立する仕事をされました。大学以外では文化庁の文化財保護行政の方面での仕事にも携わり、特別史跡キトラ古墳調査研究委員会座長、古墳壁画保存活用検討委員会座長、文化庁文化審議会文化財分科会世界遺産特別委員会委員長などを務められました。

先生は、元々の研究のフィールドであった西アジアと日本を含めた東アジア地域、つまりユーラシアの西と東の比較考古学という壮大なテーマに取り組み、東大退官後も精力的に研究を続けてきました。とくに、最近では白河館長として、これまで先生が研究されてきた成果を一般の方向けに分かりやすく講演するとともに、毎年のようにその内容を次々と本にまとめられました。

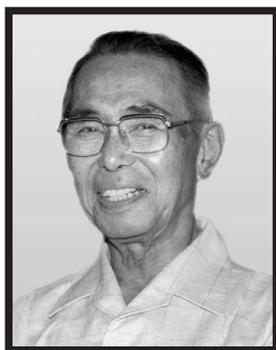
このように先生は、学内の諸施設・機関をはじめ、国の文化財行政の土台を作るという困難な仕事を次々と成し遂げられてきました。現役世代の我々は、先生の築かれた基盤を発展させながら、広い視野のもと、新たなアジア考古学の発展に努めて参る所存です。

（大学院人文社会系研究科）

## 窪徳忠名誉教授

窪徳忠先生は、2010年10月2日（土）に御逝去されました。享年97歳。先生は、昭和23年4月、東洋文化研究所に研究員として就任され、昭和24年には助教授、昭和39年に東アジア哲学・宗教部門の教授に昇任し、昭和48年4月からは研究所長を務められました。また、学外においても、日本学術会議会員として学術行政面で活躍され、昭和49年に停年退官されました。その後、立教大学教授、二松学舎大学教授、鶴見大学教授、日本民族学会会長、東洋学会理事長、南島史学会会長などを務められ、昭和59年には旭日中綬章を受章されました。

窪先生は、中国固有の宗教である道教の研究に全力を傾けられました。先生は、戦後の道教学興隆の草分けとも言うべき存在で、学問の自由という気風を承け



て自由かつ客観的に道教を研究されました。中国の民衆に深く浸透している道教を通して、一般の人々の信仰や習俗、生活を考察するという問題意識は、昭和23年に出版された『道教と中国社会』に強く打ち出されています。先生がとくに研究対象とされたのは道教の中でも金代に誕生した全真教という宗派で、道教学史全般を考察した専著『道教学史』（昭和52年）に先だって、全真教関係の著書『中国の宗教改革』（昭和42年）も出版されています。これらも先駆的な業績と言えます。

日本民俗学では道教は日本に伝来していないというのが定説でしたが、先生はそれに疑問を持ち、沖縄の宗教や習俗について長年にわたって実地調査を行なわれました。その成果が『沖縄の習俗と信仰』（昭和46年）などの一連の著述です。さらに庚申信仰についての調査も先生の大きな実地研究でしたが、視野は日本に限られず、先生の業績は、道教の本質と道教が東アジア諸地域に伝播し変容した様相を解明したことに集約されると言えます。

先生の多大な業績を偲びつつ、慎んでご冥福をお祈りいたします。

（東洋文化研究所）

# Contents

## 特集

- 02 広報センターは今年15歳になりました  
06 平成22年度第1回学生表彰「東京大学総長賞」授与式開催

## NEWS

- 08 日本翻訳文化賞受賞  
**一般ニュース**  
08 本部学生支援課  
「東大野球場」の文化庁登録有形文化財（建造物）への登録完了  
09 本部奨学厚生課  
学寮・国際学生宿舎で寮祭を実施  
09 学生相談ネットワーク本部  
「コミュニケーション・サポートルーム」開設  
10 本部学生支援課  
硬式野球部、神宮で勝利  
10 本部研究推進課  
平成22年度「東京大学専門賞」授賞式が挙行される  
11 地球観測データ統合連携研究機構（EDITORIA）  
「気候変動適応に挑む、「第7回 GEOSS アジア水循環会議」開催！  
12 海洋アライアンス  
小学校にて出前授業開催  
13 本部入試課  
「平成22年度学務研修会実務勉強会」を開催  
14 本部企画課  
「明日の東京大学—危機に立つ財政」説明会、開催される  
14 本部キャリアサポート課  
博士・ポスドク対象企業説明会開催  
14 学生相談ネットワーク本部  
「心をつなぐ工夫」（第4回、第5回）を開催  
15 本部キャリアサポート課  
知の創造的摩擦プロジェクト第11回交流会開催  
16 本部総務課  
名誉教授懇談会の開催  
16 総括プロジェクト機構  
日本の航空100年「航空技術と航空安全」フォーラム、開催

## 部局ニュース

- 17 大学院理学系研究科・理学部  
サマー・リサーチ・インターンシッププログラム（UTRIP）を実施  
17 生産技術研究所  
平成22年度自衛消防活動審査会「優良賞」を受賞  
18 大学院工学系研究科・工学部  
「安全実技体験研修」が行なわれる  
19 医科学研究所  
国際学生フォーラム2010に参加  
19 大学院教育学研究科・教育学部  
「ハラスメントを防ぐために」をテーマにFD及びSDの会を開催  
20 分子細胞生物学研究所  
留学生サマースクールを開催  
20 大学院工学系研究科・工学部  
「全学ゼミ」・「創造性工学プロジェクト」発表説明会開催  
21 大学院薬学系研究科・薬学部  
「Harald zur Hausen 教授講演会」の報告

- 22 生産技術研究所  
「外国人研究者・留学生との懇談会」開催される！  
22 大学院人文社会系研究科・文学部  
第14回東京大学文学部公開講座が開催される  
23 大学院教育学研究科・教育学部  
留学生修学旅行で三浦・小田原・箱根を堪能する  
24 医科学研究所  
「慰霊祭」行われる  
25 東洋文化研究所  
第10回東京大学東洋文化研究所公開講座が開催される

## コラム

- 26 ~総長通信~ President's Improvisation Vol.2  
27 決算のDOOR ~数字が語る東京大学 第2回  
27 FOREST NOW  
28 Policy + alt vol.14  
29 Crossroad 産学連携本部だより vol.60  
30 ケータイからみた東大 ~東大ナビ通信~ No.5  
31 Relay Column 「ワタシのオシゴト」 第57回  
32 PC リユースのわ 第13回  
32 インタープリターズバイブル vol.40  
33 読者投稿写真

## INFORMATION

### お知らせ

- 35 大学院総合文化研究科・教養学部  
「教養学部報」第533(11月4日)号の発行——教員による、学生のための学内新聞——  
35 情報基盤センター  
「自宅から検索するには？」(20分)ほか「情報探索ガイダンス」各種コース実施のお知らせ

## 事務連絡

- 36 人事異動(教員)

## 訃報

- 37 藤本 強 名誉教授  
38 窪 徳忠 名誉教授

## 淡青評論

- 40 タフな東大教授を目指して

## 編集後記

10月から学内広報を担当しています(ふ)です。どうぞよろしくお願い致します。先月号は編集後記がなかったので、初めての執筆で、ちょっと緊張!?しています。私事ですが、10月に本学にやってきました。家が近所なので徒歩通勤なのですが、毎朝銀杏を踏まないよう細心の注意を払っているため、学内を歩くのに20分ほどかかります。本誌が発行される頃は銀杏の香りともおさらばでしょうか。部局名や独特の略称などが分からず、戸惑うこともありますが、学内広報を通して、本学のことを少しずつ知りながら、楽しく編集させていただいています。みなさまからの投稿をどしどしお待ちしております!(ふ)

### ◆表紙写真◆

広報センター外観(龍岡門横)



七徳堂鬼瓦

## タフな東大教授を目指して

3年前、柏の葉公園で花見をし、腹ごなしに何人かでボールを蹴っていたら、なぜか近所の小学生とのサッカー対決になった。相手は小学生だが上手い子もいるので、つい真剣にやってしまった。最後は「この人、怖い」と言われる始末だったが、この日をきっかけにサッカーに目覚め、翌日からキャンパスの空き地で研究室のメンバーによる昼サッカーをやり始めた。自分はもともとソフトボール好きだったが、周りにはサッカー派が多く潜伏していたようで、昼サッカーはすぐに定着した。そのうち他からのメンバーも増え、最後は柏の全部局から学生や教職員が参加するまでになった。後から入ってきたメンバーは上手いので全体のレベルは上がり、昼サッカーはもっと面白くなった。ただ、初心者に出来るのはガンガン行く事だけなので、未だに「この人、怖い」と言われ続けているのは残念なことではある。ところが、この幸福な日々も長くは続かなかった。新しく建物が建ちますからと空き地を追い出されてしまい、キャンパス内でサッカーが出来なくなってしまったのである。これは困ったことで、サッカーに限らず気軽に運動の出来る場所が無いというのは精神上良くない。実際、以前の空き地ではソフトボールをする学生たちもいたので、彼らがいまどうしているのか心配である。都心にある本郷や駒場でさえちゃんとしたグラウンドがあるのに郊外の柏には空き地さえもないというのは皮肉な話である。むしろその逆で、都心にあるキャンパスであれば町に出て気晴らしも簡単にできるが、周りに何にもない柏にはスポーツくらい自由にやれないと学生も元気が出ないのではないだろうか。研究環境を整えて勉強をしていれば優秀な研究者が育つというものではないだろう。自分は日頃から学生にはスポーツを勧めている。特にサッカーを通じて、空気を読む、相手の意図を察知する、得点の嗅覚を磨く、勝負感を養うなどを学べと説いているので、ぜひ実践の場が欲しいところである。総長さん、タフな東大生を育てるためにも何とかしてください。

金道浩一（物性研究所）

（淡青評論は、学内の教職員の方々をお願いして、個人の立場で自由に意見を述べていただく欄です。）

この「学内広報」の記事を転載・引用する場合には、事前に広報室の了承を得、掲載した刊行物若干部を広報室までお送りください。なお、記事についての問い合わせ及び意見の申し入れは、本部広報課を通じて行ってください。

No.1405 2010年11月24日  
東京大学広報室

〒113-8654  
東京都文京区本郷7丁目3番1号  
東京大学本部広報課  
TEL：03-3811-3393  
e-mail：kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp  
<http://www.u-tokyo.ac.jp/>